全国造形教育連盟　日本教育美術連盟　共同開催

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道

記念集録

研究主題

“わたし”を創る

～自立と共生の造形教育をめざして～

授業実践テーマ「あったかい！」をつなげ合う造形活動

第６４回全国造形教育研究大会
第６２回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第６１回全道造形教育研究大会　札幌大会

2011.7.26～7.28

第64回全国造形教育大会
第62回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第61回全道造形教育研究大会　札幌大会

全国造形教育連盟　日本教育美術連盟　共同開催

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道

＝研究主題＝

“わたし”を創る　～自立と共生の造形教育をめざして～

授業実践テーマ
「あったかい！」をつなげ合う造形活動

会期　2011.7.26～7.28
会場　札幌市立幌西小学校　札幌市立円山小学校
　　札幌市民ホール　ホテルライフォート札幌

－主催－
全国造形教育連盟　日本教育美術連盟
北海道造形教育連盟　札幌市造形教育連盟

－後援－
文部科学省　北海道教育委員会
札幌市教育委員会　全国連合小学校長会
全日本中学校長会　全国高等学校長会
全国公立学校教頭会　全国特別支援学校長会
日本PTA全国協議会　全国国立幼稚園長会
北海道国公立幼稚園長会　北海道私立幼稚園長会
北海道小学校長会　北海道中学校長会
北海道高等学校長協会　札幌市立幼稚園長会
札幌市私立幼稚園連合会
札幌市小学校長会　札幌市中学校長会
札幌市立高等学校長会

－協力－
武蔵野美術大学　北海道教育大学
財団法人札幌市芸術文化財団
札幌芸術の森　本郷新記念札幌彫刻美術館
公益財団法人パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会

CONTENTS

3 あいさつ
菅原清貴（大会長　北海道造形教育連盟会長）
塚野昭臣（大会実行委員長　札幌市造形教育連盟会長）

4 祝辞
永関和雄（全国造形教育連盟委員長）
松山　明（日本教育美術連盟副理事長）

5 大会宣言

6 授業・提言一覧表

8 大会風景

12 大会を通して
12 “わたし”を創る
～自立と共生の造形教育をめざして～
13 「あったかい！」をつなげ合う造形活動

15 扉としての成果・課題

18 授業報告

58 提言分科会のまとめ

68 扉分科会

70 授業プレゼンテーション・全員シンポジウム・全体講評

76 各種会議報告

88 子どもアート展2011

90 声・こえ・KOE

あとがきにかえて

集録の発刊によせて
感謝：「全国図画工作・美術教育全国大会 in 北海道」を終えて

大会長
北海道造形教育連盟会長
菅 原 清 貴

「全国図画工作・美術教育全国大会 in 北海道」が終了し４ヶ月が経ちました。ご参加くださった皆様に深く感謝申し上げます。北海道造形教育連盟は、昭和26年に北海道図画工作連盟として設立されました。昨年は60周年の記念年として記念誌発行やプレ全国大会及び式典を開催しました。全国大会は、還暦を迎えた本連盟の総力をあげての取組となりました。

おかげさまで全国から945名の参加をいただき大盛会のうちに終了することができました。今大会は、戦後３回目となる全国造形教育連盟と日本教育美術連盟が共同で開催する大会となりました。第１日目は、校種別の研修さらには共同開催会議その後の「懇親の集い」が行われました。２日目は、幌西小と円山小を会場に幼児から大学生まで参加しての授業公開が行われました。授業者を中心に多くの造形の仲間が、子どもたちのしあわせに繋がる「あったかな」授業を実現させようと尽力くださいました。また、充実した実践に基づく研究発表も全国からいただきました。それら公開授業や研究発表に対し、我が国の造形教育を代表する40名を越える助言団の皆様に、ご示唆をいただきました。その夜開催されたレセプションは、360名という参加者で、会場は熱気に包まれました。最終日の全体会は、市民ホールで「全員フォーラム」を開催しました。新旧４名の調査官に「これからの造形教育」の在り方を指し示していただきました。同時開催された、「子どもアート展」は、市民にも鑑賞いただき充実した展覧会となりました。

この大会をさらに価値あるものにしてくれたのは、「実践事例集：造形新時代ひらく」の発刊でした。この事例集は、全道の幼稚園から中学校までの授業の実際、美術館との連携や音楽祭とのコラボレーション、そして地区サークルの活動の紹介など大会実行委員会広報部が尽力しまとめ上げたものです。日本教育新聞にも紹介され、大会の終了後も全国から購入希望が多く寄せられました。

様々な困難を乗り越えて実現したこの大会は、今後の造形教育の未来を指し示すものとなったと自負しています。

しなやかで繊細な感覚を持つ日本人の感性を未来につなげていくために、造形教育で培う資質や能力の大切さを全国の先生と確認できた大会でした。この素晴らしさのすべてをまとめ上げた集録を次の大会への宝として前進していきましょう。

最後に、この大会をつくり支えていただいた全ての皆様に、心からの感謝を申し上げたいと思います。

北の大地から造形美術の発信

大会実行委員長
札幌市造形教育連盟会長
塚 野 昭 臣

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を掲げて取り組んだ今大会。

全国から多くの方々に参加いただき造形美術教育の大切さを改めて実感できる大会となりましことに感謝いたします。

札幌市造形教育連盟では、子どもたち一人一人の想いを大切にした造形美術活動を実践し、教師や活動を共にする仲間とともに、みんなが「あったかい」という心のあたたかさ、思いをつなげ合う造形美術活動に取り組んできました。

今大会では、「心の発動」「感動の共有」という２つの視点をもとに幼児から大学まで20の授業を公開させていただきました。どの授業会場も参会者の熱心かつあたたか眼差しのもと子どもたちの笑顔と真剣な造形美術活動の様子を見ることができました。またどの分科会でも、授業や提言をもとに、全国の先生方からご意見が出され、有意義な会とすることができました。

これからの造形美術教育では、「共通事項」にみられる育てる資質能力を明確にし、どのように育てるのか、また、生活の中の造形美術の働きや関わりを自覚させる活動や美術文化についての理解を深める指導などが求められています。

大会最終日の全体会では、授業を振り返りながらステージ上のご助言の先生方、授業者の先生方とフロアーの全国から参加された先生方とともに、改めて、これからの造形美術教育の充実と発展に向けての決意を新たにし、造形美術教育の重要性を発信することができました。

今年は、東日本大震災、また、大会直前に日本教育美術連盟の岩崎由紀夫理事長が亡くなるという悲しみを乗り越えての大会でもありましたが、多くの成果をあげることができました。

最後になりましたが、本大会の開催にご尽力いただいた多くの団体、そして、多大なご指導、ご示唆をいただきました文部科学省のはじめとする関係機関の皆様に心から感謝申し上げます。

造形教育のエネルギーを感じる大会でした

全国造形教育連盟委員長
永　関　和　雄

「この大会に参加してよかったと感じている人はピンクを上げてください」これは、大会３日目、全体会場の市民ホールがピンク色に染まる直前のアナウンスです。表がピンク色で裏は白くなっている団扇が参加者全員に配られ、進行役の研究統括部長森實さんの問いかけに、YESのときはピンク、NOのときは白を見せ、それぞれが意思表示をしながら主体的に参加した全員シンポジウムは大変な盛り上がりを見せました。また、二つの会場に分かれて行われた20の授業公開と分科会の様子がステージの大画面でプレゼンされ、大会の全容が共通理解できるなど新たな工夫が各所に見られ、今回の北海道大会は一体感のある素晴らしい大会だったと思います。

全国造形教育連盟と日本教育美術連盟、北海道造形教育連盟、札幌市造形教育連盟の共同開催の形で実施されたこともあり、会場は全国からの参加者であふれんばかりの賑わいでした。授業公開や分科会のどの会場も熱心な参加者で盛り上がり、２日目のレセプションは大ホールに入りきれないほどの約400名が集い、造形教育への熱い思いを共有することができたと思います。

３月11日に発生した東日本大震災の大きな傷が東北の被災地はもとより日本全体に重くのしかかっている中で、その開催さえ危ぶまれた大会でした。苦しくとも力を合わせて復興するしかないことは分かっていても日本中が悲しみに包まれた中での開催準備には多くの困難があったことでしょう。大会の成功を支えた北海道の先生方のご尽力に心からお礼を申し上げます。

数年かけて練り上げた研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」は、今日のような非常時にあっても変わることのない大切な視点です。この大会で確認された造形美術教育の大切さや大会の成果を今後の教育活動につなげていきましょう。造形活動を通した共生の輪が学校から家庭、社会へと広がり、子どもたちの心を温かく豊かに育て、日本を復興させる力になると確信しています。北海道で高まった造形教育のエネルギーを全国に発信しましょう。

「全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道」大会を終えて
－絆を深め美術教育の明日を切り開こう－

日本教育美術連盟副理事長
松　山　　明

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」「あったかい！」をつなげ合う造形活動を授業実践テーマとして全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道が札幌市で開催され、多くの成果をおさめるとともに美術教育担当者のつながりを深め、盛会裏に終了されましたことを心からお慶び申しあげます。

北海道大会は菅原清貴大会会長を中心に北海道造形教育連盟、札幌市造形教育連盟が主体となり計画的に準備を進めてこられました。素晴らしい大会運営と細やかな気配りに心から敬意を表します。

また、北海道大会は３年振りに全国造形教育連盟と日本教育美術連盟が共同開催する大会となりました。参加された皆様には新学習指導要領のめざす教育課程の編成や図画工作・美術教育の充実に各地でご尽力いただいておりますが、今大会は美術教育で育成する学力とは何なのかを語り合い再考する大会となりました。これからは「美術の必要感」を自覚させ「生きて働く力になる美術教育」をめざして指導を改善していかなくてはなりません。

現在、美術教育には不確定な時代ですが、全国の美術教育関係者が各地域の実践を相互に情報交換できるネットワークづくりと共に、全国の地域を代表する理事や事務局の皆さんが中核となり、組織を活性化させることが必要です。そして、私たちが確かな指導計画と学習指導案をたて授業に臨むことが大切なのです。

全国の美術教育に関係する一人一人がそのことを自覚し、研究活動を活性化させ、活動の輪が強い絆となることを強く期待いたします。最後になりましたが、平成24年11月16日、17日には「輝け！・いのち・こころ・つながり!!」－つくりだす喜びをもとめて－を大会テーマとして大阪大会を開催いたします。全国美術教育関係者の皆様のご参加を心よりお願いいたしまして、ご挨拶といたします。

大会宣言

この度の東日本大震災において亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。また、被災地で生活している子どもの心に、造形教育の力で安らぎと希望を生み出すことができるよう、私たちも力を尽くしてまいります。造形活動は、子ども一人一人に夢や希望を生み出し、元気にする力があります。創造力を高め、新しい日本を創る力があると確信しています。また、未来を担う子どもが学ぼうとする姿は、被災された皆様の心の癒しや励ましに繋がるものと考えています。

我が国は高度経済成長を経て、めざましい発展を遂げてきました。しかし今日では、「学歴神話の変質」「雇用環境の変化」「子どもの虐待」「老人の孤立」などの大きな問題が生じてきています。

このような時代において、豊かな感性、創造性、個性などを大切にして、人間らしく生きることがますます重要になってきました。それはまた、主体性や自立性など人間としての資質や能力を重視する「生きる力」が一層必要な時代でもあると考えます。その中にあって私たちは、幼児期からの遊びや様々な体験を通して、美しいものや自然に感動する、生命を尊重するなど、「豊かな心」を育てる造形教育を一層大切にしなければなりません。

私たちは、戦後一貫して、子どもの人間形成にかかわる造形教育の振興を図り、時代が要請する教育課題に対応してきました。教育に携わる全ての人々は、人間形成としての造形教育を一層大切にしなければならないと考えています。

全国各地よりお集まりの方々と共に、この北海道の地で「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして」の主題のもと、豊かな感性を育み、子どもが自ら価値を創る「自立」と、友達のよさに共感できる「共生」の造形教育の重要性を全国に発信する研究大会として、下記の事項を宣言します。

記

1　これからの生涯学習社会に向け、常に学び続けようとする意欲をもち、豊かな感性と知性が調和した人間形成と社会における豊かな文化の育成（「自立」と「共生」）を目指す造形教育の一層の進化と充実を図ります。
2　造形教育を通して、子どもが心と体を働かせ、表現する喜びを十分に味わいながら、他者とかかわり、自分自身をつくりあげていく過程を支えます。
3　国際化の中で、地域や他の機関との連携を図り、広い視野から造形教育をとらえ直すとともにその意義を広く社会にアピールし、造形活動を愛する人づくりに邁進します。
4　保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・中学校・高等学校・特別支援教育諸学校・短期大学・大学等、また美術館等との連携を密にし、時代が求める造形教育の指導や支援のあり方を明らかにして、その充実を図ります。
5　造形教育をさらに発展させるために、表現活動、図画工作科・美術科の必要とする授業時間と、教科の専門性に長けた教諭等の配置と育成が必要不可欠と考え、これらの確保と充実を強く要請していきます。

以上、５点にわたり宣言いたします。この宣言を具体的なものにするため、全国造形教育連盟・日本教育美術連盟は大会主題に基づいた研究を、子どもの豊かな育ちにつなげ、これからの造形教育を発展させることを目的とし、全力をあげて取り組んでいきます。

平成23年７月28日

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道
第64回　全国造形教育研究大会
第62回　造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第61回　全道造形教育研究大会

※大会第一日目の共同開催の席で大会宣言起草委員（全造・日美各１名）からの提案に基づき審議し、いくつかの意見をいただき手直しの後、最終日に全体提案ののち正式に宣言を発する。

授業・提言

	扉		題材名	授業者・学年	時間・開始時刻	授業会場
幌西小	こども	1	どんどん広がる　みんなの色	伏見小　1年 中川　治	45分　9：45～	3階 工作室
		2	くるくるカラフル	緑丘小　4年 濱口　裕子	45分　9：30～	3階 5年5組
	みらい	3	ぼく・わたしの心もよう	伏見小　4年 柿本美奈子	45分　9：45～	2階 4年1組
		4	空　遊ぶ	幌西小　3年 土門　俊介	60分　9：30～	体育館
		5	きこう　はなそう　かんじよう	中の島小　6年 祖父江　瞬	45分　10：00～	2階 あったかルーム
		6	Peace Message Card	あいの里東中　2年 寺林　陽子	50分　9：45～	1階 理科室
	教師	7	にじいろの　もりで　あそぼう	いなづみ幼　年長 三浦真奈美	45分　9：45～	幌西の森 （前庭）
		8		幌西小　2年 吉伊　宏子	45分　9：45～	
		9	大切な相手へ ～色のおもてなし～	札苗北中　1年 則友　冴子	50分　9：30～	3階 ランチルーム
		10	高校の美術科のあり方と授業	旭丘高他3校 齋藤　周　他3名	10：00～	3階 ふれあいルーム
円山小	こども	11	土の中たんけんたい	札苗幼稚園　年長 高橋　梓	45分　9：30～	4階 5年ws
		12	思いとび出して	手稲西小　4年 藤岡　真弓	45分　9：45～	4階 4年1組
		13	カラフル　ワンダー　ホール	円山小　3年 宮田　珠世	45分　10：00～	1階 エントランスホール
		14	感じて語ろう	西岡中　2年 多田　絵美	50分　9：45～	2階 多目的室
		15	My Life+ ～土に思いをこめて～	米里中　2年 細川亜矢子	50分　9：30～	3階 6年4組
	みらい	16	おもいを言葉に ～墨からの造形～（心のレタリング）	手稲中学　2年 川内亜矢子	50分　10：00～	2階 理科室
		17	旅するムサビ in 札幌 ～featurring北教大～	武蔵美大生 北教大生	45分　9：45～	4階 4年3・4組
	教師	18	もく木　トントン　わ～くわく	あやめ野小　3年 橋本　祥子	45分　9：45～	2階 図工室
		19	ぐるぐるワールド	百合が原小　3年 矢野　宜利	60分　9：30～	3階 3年ws
		20	みてみて発見！ 日本の美～仏像編	屯田北中　2年 市川　雅基	50分　10：00～	4階 6年1組

一　覧　表

提言者			分科会会場	司会者	記録者	助言者		
愛　知	大宝小	河口　貴子	3階 工作室	水野　一英（宮の森中）	岩崎　重明（南月寒小）	北海道	顧　問	関　健治
北海道	附属釧路小	若林　朗子				沖　縄	比屋定小	榮野元康一
沖　縄	潮平小	宮里　雅代	3階 2年1組	山　薫（幌南小）	岩井　久根（豊平小）	京　都	市教委	中下　美華
愛　媛	高浜小	木村　早苗				北海道	札幌学院大	藤井　正治
北海道	岩見沢小	竹田　睦生	2階 1年5組	館内　徹（あやめ野中）	高梨　美幸（平岡南小）	東　京	花園小	横内　克之
東　京	向原小　上野千恰子/陣小　内田佳代子					山　口	今宿小	弘中　順一
佐　賀	佐賀大附属小	冨永　千晶	2階 1年4組	藍下　栄一（藤野南小）	東野　留美（幌西小）	北海道	道教大岩見沢	阿部　宏行
北海道	大倉小　岩崎 愛彦　江別第二中　井上 恭義					熊　本	楠　中	渡辺　浩之
熊　本	健軍小	星子　聖一	2階 6年4組	白井　真澄（二十四軒小）	奥山　綾芽（常盤小）	神　戸	本多円小	貝森　忠人
広　島	川内小	川島　仁氏				北海道	道教大札幌	冨田　泰
北海道	光陽中	吉野　法行	1階 理科室	向井　正樹（あいの里東中）	瀬川　欣子（八軒中）	沖　縄	浦添中	金城　安正
沖　縄	東風平中	二宮　陸生				大　阪	大阪教育大	佐藤　賢司
北海道	大地太陽幼	星　恵	1階 3年2組	六本木祐司（山鼻中）	上田　克美（きくすいもとまち幼）	北海道	大地太陽幼	坂本　行正
北海道	札幌英進幼稚学院	若杉　由恵				千　葉	淑徳大学	横　英子
						埼　玉	十文字学園	平田　智久
大　阪	今川小	狩谷　潤也	1階 3年1組	櫻田　悟（平和小）	石川　恭子（平和小）	北海道	顧　問	今　裕子
北海道	上更別小	土橋　直美				山　梨	日野春小	浅川　徹
青　森	板柳中	高安　弘大	3階 ランチルーム	浅井　邦昭（北陽中）	久蔵美和子（稲穂中）	大　阪	堺市教委	田中　圭一
奈　良	二名中	江村　圭造				北海道	札幌市教委	野切　卓
北海道	札幌大谷大学	平向　功一	3階 ふれあいルーム	木原　英俊（月寒中）	大町　香織（向陵中）	東　京	武蔵野美術大	大坪　圭輔
東　京	九段中　落合 良美　小谷江一郎					愛　知	愛知教育大	藤江　充
北海道	なかのしま幼	西岡由花子	3階 5年3組	森　美由紀（白楊幼稚園）	高松　摩衣（ひまわり幼稚園）	大　阪	成蹊短大	藪田　一子
大　阪	成蹊大	塩見　知利				北海道	藤女子大	杉浦　篤子
北海道	中の沢小	赤坂　勝男	3階 6年2組	川島　正夫（手稲北小）	中村　麻紀（厚別西小）	北海道	教育センター	畑　俊明
北海道	三川小	佐藤　祈				広　島	大町小	栗栖　恒久
北海道	上風連小	外川　篤司	体育館	福島由紀子（円山小）	坂口　健（平岸小）	東　京	元全造連委員長	鈴石　弘之
東　京	高島第五小	大畑　祐之				京　都	石田小	平尾　隆史
大　阪	夕陽丘中	堺谷　朋美	2階 多目的室	森岡　香子（稲穂中）	浜口　秀樹（平岡中）	北海道	道教委	工藤　雅人
北海道	柏陽中	工藤　由香				東　京	南中野中	牧井　直文
東　京	南中野中	内田　善人	6年3組	椿野　衣江（真栄中）	宮藤　啓代（小樽向陽中）	大　阪	東淀中	板本　宏
京　都	深草中	喜田　健嗣				北海道	顧問	石谷　正美
大　阪	深井中央中	伊藤　慶孝	2階 理科室	中西　毅（向陵中）	安藤　桃子（手稲中）	北海道	道研究所	中島　健朗
北海道	遠矢中	更科　結希				山　梨	須玉中	鹿野　晃
秋　田	仁賀保高	黒木　健	4階 4年2組	中山　龍雄（星置中）	金子　睦（中央中）	東　京	武蔵野美術大	三澤　一実
大　阪	三島高	八木　遼蒼				和歌山	和歌山大	永守　基樹
						北海道	道教大旭川	南部　正人
山　梨	高根清里小	臼井　恭子	2階 図工室	堀口　基一（附属小）	菊地　健史（白楊小）	大　阪	長吉南小	長谷川辰夫
奈　良	奈良女子大附属小	大野木位行				北海道	道教大旭川	名達　英昭
北海道	千歳桜木小	庄子　広美	2階 3年1組	今谷　孝（八軒北小）	中　奈津子（南の沢小）	東　京	五本木小	鈴木　陽子
東　京	愛日小	平田　耕介				佐　賀	開成小	宮崎　祐治
滋　賀	瀬田中	伊庭　照実	4階 6年1組	安田　仁昭（平岸中）	豊田　ゆき（屯田北中）	北海道	道教大釧路	佐々木　宰
北海道	附属釧路中	花輪　大輔				北海道	北斗中	山崎　正明

大会風景

第1日目
ホテルライフォート

校種別部会

共同開催会議

共同開催懇親会

第2日目
幌西小学校

第2日目
円山小学校

第2日目
扉分科会
なんちゃってワールドカフェ

第2日目
歓迎レセプション

第3日目
全体会・閉会式

大会宣言を発表する時任勝 全道連事務局長

大会の成功に感謝

「てぃーだ(太陽)の島で」

「大阪へどうぞ」

稲實順 大会事務局長

櫻田豊 大会事務局次長

田口和男 実行副委員長

小泉信朗 実行副委員長

研究主題 “わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～

北海道造形教育連盟　研究部長　湯浅　大吾

「全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道」は、全国から多くの造形教育に携わる皆さんをお迎えし、成功裡に終了することができました。

わたしたちは、今大会の研究主題として「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を高々と掲げました。これは、大会宣言にも表現されているように、現代の社会情勢、そして造形教育を取り巻く今日的な状況を踏まえ、未来を創る子どもたちに**「生きる力」と「豊かな心」を育てる造形教育**を大切にしていかなければならないと信じる私たちの思いから生まれた主題です。

大会の意義は、本集録のさまざまな記事や原稿で明らかになっていると思います。研究主題“わたし”を創るがどのような活動場面や、子どもたちの様子、教師のかかわりの中に表れていたのか具体的な授業を通して振り返ってみます。

自立した学び

教師のまなざしの扉「みて観て発見！日本の美～仏像編」では、中学生にとってほとんど接点の無い仏像を学習の対象としていました。しかし、授業が始まると、子どもたちは感性を働かせ自分の見方や感じ方を通して、アートカードの中の仏像と自分との間に新しい意味をつくり出している姿が明らかに見て取れました。私たちのめざす**自立した造形活動の一つの姿**です。そこには中学生と仏像の距離を縮めるための教材化や授業の展開といった教師の手立てが講じてあります。

「やってみたい」という「**心の発動**」が子どもの中に起こるためには、**学習者と学習対象（内容）の距離**が近いことが必須条件と考えます。そのため、私たちは、子どもの生活の中から教材化を図ったり、今回のように学習対象との距離を縮めたりするスケッチやアートカードを取り入れるなどの方策に目を向けてきました。

学びの道程

さらに本研究大会を通して、学習対象との距離を縮める過程で子どもの中で何が起こっているのかということにも目を向けていく必要性を学ぶことができました。それはどのくらいの距離感から縮めていくのがよいのか、そして子どもの発達に伴い、どのように在るべきなのかなど、子どもと学びとの関係を考えていく上で、新しい視座をもつことができました。

前述の授業では、最初に好きな仏像のカードを選びます。その段階で既に、お互いの感じ方の違いが生まれます。次に、グループで複数ある仏像のカードを類分けします。どこに着目したのかお互いの見方の違いがやり取りされました。さらに、全体で類分けの視点の違いを交流することでお互いの**感じ方や見方の異同が共有**されました。最後に仏像に対する自分の見方や感じ方の**変容を交流**しました。授業実践テーマ**「あったかい！」を繋げあった**具体的な場面です。以上のように、本大会の全ての授業は「心の発動」を起こさせる学習対象との距離を考え、**「学びの道程」**としてその距離のあり方（内容）を工夫し、明らかにしようとしました。

共生の学び

同じ時間と空間を共有することで、お互いの感じ方や見方のやり取りは発生します。さらにそうしたやり取りや**自己の変容を実感する場**を意図的かつ自然に構成することで、他と違う自分のアイデンティティーと成長していく自分に喜びを感じ、より“わたし”が**創られていく「共生の学び」**が実現されるのではないでしょうか。

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」は、上川・旭川、函館における全道造形教育研究大会での実践を通して検証を重ね、札幌へバトンをつないできたものです。これをもとに本大会では20の授業と40の提言で全国へ発信することができました。さらに、授業分科会、提言分科会、扉分科会、そして市民ホールでの全体会を通して参会者の方々とともに深めながら共通化してきた成果と課題を、来るべく「十勝・帯広大会」へとバトンをつないでいきます。

授業実践テーマ

「あったかい！」をつなげ合う造形活動

札幌市造形教育連盟　研究部長　森實　祐里

1 「あったかい！」姿が見られる授業をめざして

めざす子どもの姿から

北海道造形教育連盟の研究主題「"わたし"を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を具現化するために、札幌市造形教育連盟では、子どもの発達にふさわしい指導・必要な支援を考えて取り組んできました。

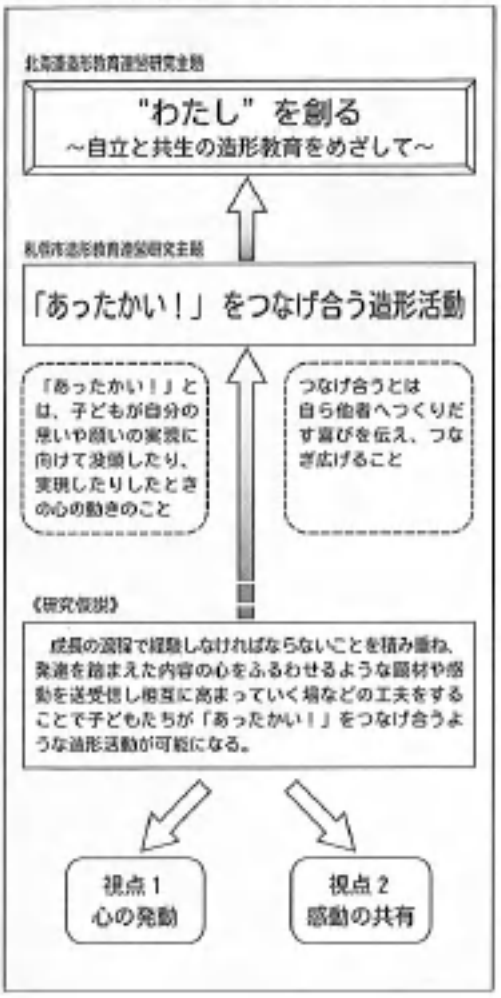
はじめに考えたことは、私たちがめざす造形活動を、子どもの姿を通して考えていくことでした。平成19年度、幼稚園から中学校までの実践を行い、思いを膨らませながら、「もっと？したい」という生き生きと活動する子どもの姿が見られました。また、友達の造形活動のよさを感じながら協力して活動する姿や、今までの学習を生かしながら熱中して取り組む姿も見取ることができました。そこで子どもたちがより生き生きと造形活動に取り組んでいくために、子どもの心がふるえるような題材との出会いや、対象・場・他者との対話を支えていく教師の支援の在り方について考えることができました。

授業研究を通すことで共通に見えてきた私たちのめざす子どもの姿から、研究主題を『「あったかい！」をつなげ合う造形活動』と設定しました。

「あったかい!!」をつなげ合う姿

平成20年度の実践からは、わたしたちが大切にしたいことを明確にすることができました。一つ目は子どもたちが造形的な能力を発揮させながら題材に取り組み、仲間と共に造形的な資質を高め合う姿です。もう一つは、一人一人の思いや願いを大切にしながら、他者と感動のキャッチボールを可能とする環境などの設定により、研究主題を子どもの姿で具現化したいと考えました。

平成21年度からは、授業を見る視点を、子どもの「心の発動」と「感動の共有」と設定し、「あったかい！」をつなげ合う造形活動に向けての実践を積み重ねました。



授業づくりの視点

今回の大会では、「扉」ごとに授業を考え、どの校種でも２つの視点から授業づくりを行いました。

わくわくするような材料や題材の投げかけなどを工夫し、子どもの心が動き出す「心の発動」を視点１としました。また、他者と感動し合える場の設定や教師のかかわりを吟味する「感動の共有」を視点２とし、「あったかい！」子どもの姿がたくさん見られる授業を目指してきました。

授業実践テーマ

「あったかい！」をつなげ合う造形活動

2 3つの『扉』

まなざしという考え方

今回の全国大会は、2001年に札幌で開催された全国大会の考え方を踏襲し、校種を越えた「扉」で研究を進めてきました。

扉は、もともと授業改善の視点であり、私たちが議論の中心として話し合いの柱にしてきたものであります。また、これまでの造形教育を振り返り、後世へ伝えていく図工、美術の不易として確認する意味ももたせたいと考えました。そこで、私たちがめざす造形活動に迫るために、授業を通してどのような“まなざし”が必要か考えました。

- ○子どもの感性を引き出すことができる教材化・題材構成になっているかを子どもの視点から問い直す“こどものまなざしの扉”
- ○子どもたちの資質や能力をとらえ、育む力を明確にした教師のかかわりを問い直す“教師のまなざしの扉”
- ○「社会とのつながり」や「授業の広がり」の可能性を視野に、生きる力を育む造形教育が未来につながることを問い直す“みらいへのまなざしの扉”

の、3つに絞りました。

「扉」から考える

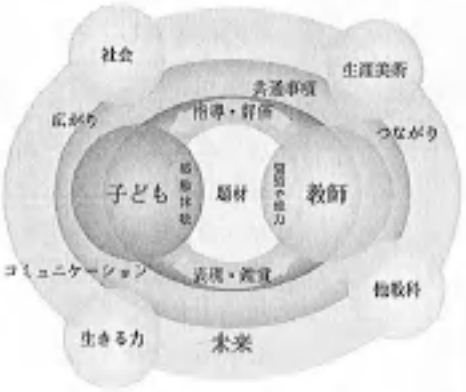
設定当初から、“こどものまなざし”と“教師のまなざし”は表裏一体で、重複するところがあることや、“みらいへのまなざし”は何をみらいと設定するのか難しいなど、問題を抱えての出発でした。ですが、授業づくりを進めていくことで、「扉」での主張すが明確になっていったり、新たな問題点に気付いたりしながら、扉論は何度も再考し大会を迎えました。

「扉」ごとに扉論の吟味を重ねていく中から、この3つの扉はどの授業にも当てはまるということが混乱を招いた要素の一つであることが明らかになってきました。また、“みらいへのまなざし”だけは授業ではなく題材として捉えなくてはならない、と考えると他の2つの「扉」とは階層が違うなど、「扉」ごとの共通点や相違点が見えてきました。実際に指導案をつくる場面では、扉責任者を中心に授業者や司会者が悩み戸惑ったところが多かったように感じています。

各授業を「扉」から分析的にみることで、より具体的な改善点が明らかになっていきました。また、「扉」の設定についても、課題が浮き彫りになりました。

「扉」の設定の難しさを感じる反面、大きな成果として、校種を越えて造形教育に対する考え方や指導観、子ども観などを交流する事ができました。これにより、互いに理解し合い扉メンバーの絆が深まっていったことが、今回の大会のなによりも大きな収穫となりました。

『あったかい！』をつなげ合う扉の構造図



こどものまなざし

扉としての成果・課題

宮田　珠世・水野　一英

【扉の主題】 子どもの感性を引き出せる教材化・題材構成になっているかを子どもの視点から問い直す

題材の視点

○子どもの「やってみたい」を引き起こす感動体験のある魅力的な題材（教材）
○多様な思考や判断、試行を可能にする形・色（彩）・材料をもとにし、活動しながら発想がふくらむ題材構成

授業の視点

心の発動	感動の共有
・発見や感動を生み、題材を自分のものとしてとらえることのできるような“投げかけ”（題材の提示）のある（見える）授業	・発見や感動を認め合い、自他を高めるための、子ども同士、子どもと教師のつながり（かかわり）を生む（見える）授業

〈見えてきたもの〉

①心の発動：鑑賞における作品選定の仕方の再考、教室環境の改善。

鑑賞においては、子どもたちに「何を見せたいのか」、「どう見てもらいたいのか」が重要であり、有名無名の問題ではない。もちろん、普段見ることのできない、美術的な価値のあるものを見せる授業もあるが、基本はその鑑賞における目標、ねらいの設定が重要である。

また、鑑賞においては、そのねらいに応じた「見せ方」も重要となる。表現につながる場面の鑑賞では、いかにして題材の中に、子どもの意識や思いを入り込ませるかということが大切であり、物質的、空間的な視点から、様々なアプローチを試みていく必要がある。

②感動の共有：図工・美術科における“言語”の重要性、“言語を介した交流・共有の場”の設定

子どものまなざしの授業の視点に大きく関わっている部分である。授業は教師の“投げかけ”から始まる。そして、子ども一人一人の作品や思いをつないでいく。いずれも作品のみならず、言語が必要となってくる。全国大会の授業においても、教師や子どもの“一言”で深まったり、広がったりする場面が見られた。投げかける言語の吟味、そして、子どもの発する言語の意味をしっかりととらえ、共有していくこと（言語活動）を今後も重視していく必要がある。

③その他：資質・能力（子ども）の視点から見たカリキュラムづくり

前述したように、過去の学びがその時間（題材）で生きていた授業がいくつか見られた。材料や道具の扱い、技法、知識や考え方などがその場で完結してしまうのではなく、その後活用されることにより、習得したことが定着し、さらに他の学びへと転化していく。子どもたちの経験値が増えて、発想や構想の能力の育みにつながるであろう。つまり、常に新しい試みを経験させていくことも一つの方法ではあるが、子ども自身が学んだことを生かして、表現の方法や手段を選択できるということは、与えられた表現ではなく、自分自身で表現したという喜びや、自己肯定感につながっていくのではないかという考えである。発達に応じたカリキュラムの作成は今までも行われてきたが、内容面での系統性や関連性のあるカリキュラム作成が、子どもの可能性をさらに広げていくことにつながっていく。

みらいへのまなざし

扉としての成果・課題

石川　早苗・鼓下　栄一

【扉の主題】　「社会とのつながり」や「授業の広がり」の可能性を通じて未来につながる子どもの生きる力を育む造形教育を問い直す

題材の視点

○造形活動を通じ、子どもの未来につながる「生きる力」が発揮され確かに身に付く題材（教材）
○これまでの学校・教科・授業などの枠組みにとらわれず、いわゆる「個」としての「広がり」または「つながり」をもとに生きる力が育まれる題材の構成

授業の視点

心の発動　　感動の共有

・枠にとらわれない活動の展開や場の構成によってねらいに迫っていく授業
・個で完結するのではなく、他者とのかかわりで作品のよさや感じたことを自発的に共有し、新たな価値を発見していく授業

〈見えてきたもの〉

①心の発動：豊かな「つながり」を生み出す題材の開発と「つながり」で育まれる資質・能力の明確化

全国大会の実践では、題材と向き合う中で、子ども同士が自発的に「つながり」（＝コミュニケーション）を求めていく姿が見られた。社会へのメッセージ性のあるテーマの設定、道徳などとの関連した心に響く題材、「本物の作品」を目の前にした対話型の鑑賞活動、外部団体との連携を基にした新たなメディアを活用した題材など、学校や教科、授業の枠にとらわれない柔軟な題材の開発が、子どもの心を揺り動かし、自ら他者との「つながり」を求めていくことになるのだと考える。しかし、大切なことは、その「つながり」の先にある「育みたい資質や能力」である。造形教育における「他者とのコミュニケーション」により高まる資質や能力とは何かを整理していくことが必要であると感じた。

②感動の共有：「つながり」によって新たな価値を共有し、個の中で再構成していく題材の構成

全国大会の実践では、他者との「つながり」によって自分の表現への自信につなげたり、新たな見方や感じ方に気付いたりと、他者との「つながり」を通して互いに高め合う姿が見られた。特に、鑑賞の活動においては、形や色、イメージなどをキーワードに、互いの思いを言葉にしてつなげていくことが、新たな価値への気付きにつながると考える。他との「つながり」からどのような価値に気付かせることが、個の資質や能力を高めることにつながるのか、また、その価値を共有する場をどのように設定することが、個の中で再構成することにつながるのか、今後も探っていく必要があると感じた。

③その他：育みたい力を基にした外部団体との連携や授業構成の在り方

育みたい資質や能力を基に、個としての「広がり」や「つながり」を追い求めていくと、教室や学校、教科、授業などというこれまでの枠組みを柔軟にとらえて題材を構成したり、活動を展開したりという広がりが生まれるのは当然の方向性である。ねらいの共有の仕方や具体的な連携・授業構成の在り方、学校の協力体制やカリキュラムへの位置付けなど、整備・精査していくことはたくさんあると思われるが、子どもの「生きる力」を育む造形教育の可能性を広げる意味でも、今後も様々な分野からアプローチしていくことが大切であると感じた。

教師のまなざし

扉としての成果・課題

大高　雅子・堀口　基一

【扉の主題】 子どもたちの資質や能力をとらえ、育む力を明確にした教師のかかわりを問い直す

題材の視点

○育みたい「資質や能力」を明確に設定し、それらを実現する教材化を通じて、子どもが資質や能力を発揮できる働きかけや受け止めができる題材

○造形的な学びを子どもの姿の中からとらえ、題材を通して育まれる資質や能力について、授業過程と子どもの心の動きや変容を大切に見つめる評価のある題材

授業の視点

心の発動	感動の共有
・子どもに近づき、寄り添い、支える働きかけがあり、また、ねらいが明確で、ねらいに迫るための手だてが見える授業 ・子どもの心をふるわせ、意欲を高める手だてがある授業	・子どものよさを発見し、共に感動する評価活動がある授業 ・過程をとらえ、共に学ぶ仲間との心のつながりを大切にした場の構成がある授業

〈見えてきたもの〉

①心の発動：寄り添い、ねらいに向かい、励まし支える教師のかかわり

「子どもの心を発動させる」ためには、まず目の前の子どもの理解が大切である。温かい表情や言葉がけ、優しいまなざしをもって寄り添うようにかかわり、心を通わせることで子どもの心は発動していく。このようなかかわりでは、学習のねらいをしっかりとらえた価値付けが大切になる。ねらいを意識したかかわりによって、学びの喜びや意味を実感し、さらに心を発動していくことができる。

また、材料の適度さや学習環境の働きによって、子どもたちの関心や意欲を高められることも本大会の授業を通じて見えてきた。教材となる材料が子どもの活動にとってどの位の抵抗や適度さをもっているのか、ねらう活動に環境の構成は妥当なのかなど、「教材」を子どもたちの実際の姿から「授業」へ再構成していく教師のかかわりの大切さが再確認された。

②感動の共有：「よさ」を明確にし、発見したりつなげたりする場をつくる教師のかかわり

表現や鑑賞の活動をしている子どもたちの「よさ」を明確にし、しっかりとらえることが感動の共有の鍵になる。本大会の授業では、「"わたし"の形や色を創り出し、美しさを求める姿」を「よさ」として授業を行った。教師は、子どもたちが感じたことや考えたこと、行ったことなどに価値付けしつつ、友達にもその価値をつなげていく。時には、小グループでの対話がつながりを容易にし、時には、異学年のかかわり合いが優しさや憧れといったつながりをつくり出していた。教師は学習内容を教えるだけではなく、子どもたちがつながる場を授業の仕組みとして構造化し、感動を醸成していく過程を大切にしていかなくてはならない。

③その他：「あったかい」評価を授業に生かす教師のかかわり

これまでの授業研究を通し、教師の扉から授業改善の視点をまとめると、「育みたい資質や能力を明確にした学習目標の設定」「材料や用具、活動場所などを意図的に構成した学習環境の整備」「子どもの思いを連続させる学習計画の作成」「温かなまなざしで心を通わせる学習評価」の4点が挙げられる。

これらの視点を、「授業づくりで基軸となる教師の仕事」として改めてとらえ直し、今後の授業づくりに生かしていく。

これからの課題としては、評価に関する具体的な手立てについて検証していきたい。ワークシートや対話、写真、動画等による記録などのほかにも、今回の大会で用いた評価方法を検討しながら、より簡易でありながらも子どもに寄り添い、理解を深められる有効な方法を実験的に模索、検証していきたい。

こどものまなざし

題材名 **どんどん広がるみんなの色**

授業者　中川　治（札幌市立伏見小学校）
助言者　関　建治（北海道：顧問）
　　樂野元康一（沖　縄：久米島町立比屋定小学校）

成果と課題

□授業会場に色を感じる工夫があった。
□シャボン玉を教材化し、経験が生きるところが子どもの興味を喚起した。
■シャボン玉の色が紙に広がる美しさに感動が今ひとつだった。
■シャボン玉の色を写す子どものやりたいことと違ったのではないか。１年生であればもっと手を使った直接的な活動があったほうがよかった。
■題材構成に、もう一工夫あれば、子どもの活動がシャボン玉からできる形や色に向かっていったのではないか。

助言者からの講評

□造形遊びは見立てに重点がおかれがちであったが、この授業は新しい形の提案であった。図工は子どもの感覚に深くかかわっている。何気なく、当たり前のように見ているところに、培ってきたものが大きい。新指導要領の中で、子どもに寄り添いながら、思い付きを大事にしたい。何を発見し、何に感動したかを改めて見直す必要がある。
□図工は、楽しい教科で夢中になれるもの。自分の表現を認めてくれることが、大きな意欲につながる。感じたことを自由に表現できるような造形遊びは作品づくりではない。造形遊びで大切にしたいことは、材料の価値を教師がどのように認めていくかである。導入時に「形や色に残そう」ではなく、子どもが「形や色が残ったよ」というところに価値がある。

子どもへの手紙から

○授業を見せてくれてありがとう！とっても楽しそうでうらやましかったよ。私もクラスの子たちと一緒にやってみるね。中川先生が「今度、もっといろあそびしよう!!」って、約束してくれたね。どんな形や色になるんだろうね。

○色がついたシャボン玉が画用紙につかまってきれいでした。いろいろな色が重なってにぎやかになりました。ひとつの色もかわいいですが、みんなが飛ばしたシャボン玉が、みんなの色と合わさって仲よしになりました。

授業を終えて授業者から

低学年の子どもたちの「やってみたい」という思いを大切にしたいと考え、シャンボン玉という教材化を試みました。シャボン玉に色を付けることで、色の美しさや重なりを感じて、楽しみながら活動していけるのではないかと考えました。そこで、色水シャボンを５色に限定することで、混色をするためには友達とのかかわりが必要になると考え実践しました。活動の中で子どもたちは「一緒に吹いてみようよ」と交流が自然に生まれていました。しかしながら、シャボン玉を飛ばす行為とシャボン玉の色を紙に写すことが、子どものやりたいことと離れていたのだと感じています。

教材化するにあって、どのような材料（今回は彩液を使用しました）を使うか、場の設定はどのようにするかなど多くの先生とたくさん話し合うことが勉強になりました。

題材名 くるくるカラフル

授業者　濱口　裕子（札幌市立緑丘小学校）
助言者　中下　美華（京　都：教育委員会）
　　藤井　正治（北海道：札幌学院大学）

成果と課題

□色にこだわってつくることや巻くだけではなく伸ばす工夫もできた。また、互いの作品を見合い鑑賞することもでき、形や色の組み合わせを味わった。

□学習のねらいにそって、子どもたちに声をかけることで授業の目標がよりはっきりしていた。

■紙テープの長さ幅、台紙に色など、もっと自由であってもよかったのではないか。そうすることで、より広がった表現になったのではないか。

助言者からの講評

□心の発動を生むためには、思いのままに紙を巻く必要があったのではないか。そこが、この授業のねらいとなり、題材設定に大きくかかわっていく。また、今日の授業で子どもたちの意欲にスイッチがどう入ったのかは、この前時までにいかに作品の中に子どもの思いが入っていったかであると思う。

□教科性が弱いといわれる図画工作。子どもの数だけ答えがあることが、他の教科と決定的に違うが、それを教師が受け止められるかどうかが図工のよさであり難しさでもある。心にスイッチを入れるのは教師の仕事である。授業が始まってからスイッチを入れるのではなく、授業が始まるまでにスイッチが入っているようにしたい。そして子どもの心の高まりが消えることなく活動が連続できるように工夫することが必要となる。

参会者の声から

○お互いのよさをいいながら評価し合うことが大事です。カウンセリングマインド、共感的理解に立った授業づくりを感じました。子どもに語りかける先生の表情がとてもよかったと思います。あったかい気持ちになりました。

○授業を見て感じたことは、教材研究、教材の力、題材理解が重要であることです。そして4年生という発達段階にあったねらいを絞って子どもたちに提示していくことが子どもの力につながっていくことを感じました。

授業を終えて授業者から

「子どもにどんな力をつけたいか」という視点を大切にしながら、「じゃあ、どんな手立てが必要だろう？」と授業づくりを進めていきました。大会まで何度も話し合ったり試したりし、たくさんの方々にご教授いただきました。

大会当日は、何より子どもの笑顔がたくさん見られたことが何よりの宝物です。子どもたちも「緊張したけど楽しかった！」と言っていました。大会を通して子どもたちも私自身も、大きく成長できたのではないかと思います。

分科会でも、多くのことを学ぶことができました。たくさんのご参会ありがとうございました。

幌西会場

題材名 **ぼく・わたしの心もよう**

授業者　柿本美奈子（札幌市立伏見小学校）
助言者　横内　克之（東　京：新宿区立花園小学校）
　　弘中　順一（山　口：周南市立今宿小学校）

成果と課題

□スパッタリングやスタンピングなどの技法を段階的に指導することで、子どもたちはモダンテクニックに意欲をもって取り組み、偶然から生まれた形・色の美しさや面白さを楽しむことができた。

□子どもたちが作品を見て自由に語り合うことができた。抽象表現の設定が子どもの発達段階に合っていたと考える。

■作品を見て、見立てたり物語を想像したりする児童が多かったが、そこからさらにイメージを膨らませて作者の思いや心情へと気付きを深めていくような展開が必要であった。

助言者からの講評

□図工の中での言語活動が４年生という発達段階でよく生かされていたように思う。モダンテクニックからの作品もカリキュラムの中には必要。本物そっくりに描く力だけでは創造的な活動には広がっていかない。見立てをもとに交流することで、お互いの想像力に触れることができる。

□分科会の中ではとても鋭い意見が出ていた。全国から集まってきたみなさんの意見という感じがしました。東京では専科なので、週に１回の授業の中でどのようにしていくのがいいのかを考えることが重要である。美術・図工の教師としてこの教科を通して子どもたちをどのように育てていくかを再認識する機会としたい。

子どもへの手紙から

○みんなそれぞれが描いた心もようが、とてもすてきでした。そして、何よりおたがいに友達の作品をよく見て、いろいろな感じ方をしているのが、すばらしいと思いました。

○夏休みだというのに、図工の勉強を見せてくれてどうもありがとうございます。ローラーをころころさせたり、まるいスタンプをペタペタおしたり、きっと楽しんで作品を作ったのだろうなと想像がつきました。すてきな作品ばかりでした。また、友達へのかかわり方、声のかけ方も思いやりがあって、すばらしいなと思いました。すてきな授業をどうもありがとう！

授業を終えて授業者から

作品をつくる時は、ローラーをころがしたり、チョークでぬったり…。絵の具は絵の具でも使い方がいろいろあって楽しかったです。場所選びはなかなか難しかったです。絵や画用紙にあう場所はなかなか見つけられませんでした。

一番楽しかったことは、絵の鑑賞です。どこが楽しかったというと、いろいろな絵を見れるところと題名を考えるところです。絵を見てみてみんなぜんぜんちがう題名を書いていたので人によってちがうことがわかりました。

みらいへのまなざし

題材名

空 遊ぶ

授業者　土門　俊介（札幌市立峡西小学校）
助言者　阿部　宏行（北海道：北海道教育大学岩見沢校）
渡辺　浩之（熊　本：熊本市立楠中学校）

成果と課題

□APAとの連携により、カメラを活用した造形活動の新たな可能性を探ることができた。

□カメラで作品を撮影することによって、子どもの中に作品への思いや価値が変わったことが大きな成果である。

■レンズを通して作品を見ることへの面白さ、カメラで作品を撮影する必然性が必要であったのでは。

■外部団体との連携によって、子どもにとっても外部団体にとっても学びになる連携のあり方を探っていくことが課題である。

助言者からの講評

□子どもは撮影を楽しんでいた。今回は子どもがどんな空を描くのかを楽しみにしてきた。子どもたちの考えた空は、想像をはるかに超えた素晴らしいものだった。造形遊びは自分で発想・構想して、それを繰り返すことなんだと、ある先生が教えてくれたことを思い出した。

□子ども自身がイメージをもつことが大切。この授業では、「造形遊び」と「場所」という、２つのキーワードをもとに授業づくりをしてきた。今・ここでやっている授業を大切にすることが、未来につながっていく。未来へのまなざしの扉で主張したかったことである。だが、難しかったのは社会とつながるという点であった。３年生の子どもたちにとって、写真を作品とみていくことが簡単ではなかった。

子どもへの手紙から

○一生懸命勉強したね。デジカメはポーズや友達と家族と景色だけでない使い方がわかったね。図工の作品を写したい気持ちになったかな。いろいろな角度から写してみると、おもしろさが出てくるよ。光と影の大切さもよかったね。ズームを使った一つの面を大きくしたり、背景を考えたりしたね。図工は絵具や工作用具だけではないんだね。

○みなさん今日はありがとうございました。一生懸命に学習している様子がとても素敵でした。図工は答えがひとつしかない勉強ではありません。100人の子どもがいたら100の答えがある勉強です。一人一人の思ったことをこれからも大切にして下さい。そして、つくりだす喜びをたくさん感じてください。それがみなさんの元気に生きる力になります。

授業を終えて授業者から

今回の授業づくりをたくさんの先生と話しをしながら時間をかけて考えました。子どもたちが熱中するにはどうしたらよいのか、子どもの意欲をどのように高めていけばよいのかを中心に題材を構成しました。授業をしながら、「先生、次にどうしたらいい？」という質問がなかったことはすごいと思いました。子どもたちのやってみたいことが、どんどん生まれていることが伝わってきました。

APAとの活動もあり、たくさんの方の力をお借りしながら授業を行いました。APAの方との打ち合わせでは、子どもたちの活動が限定されるような言葉がけは避けてほしいとお願いし、子どもたちの力を引き出してもらえるように「褒めて」ほしいと打ち合わせをしました。思ったようにいかなかったところもありましたが、子どもたちにとって大きな刺激になったと思います。

みらいへのまなざし

題材名 **きこう はなそう かんじよう**

授業者　祖父江　瞬（札幌市立中の島小学校）
助言者　貝森　忠人（神　戸：神戸市立本多門小学校）
　　冨田　　泰（北海道：北海道教育大学札幌校）

成果と課題

□その場に本物の彫刻作品があるので、言葉だけの鑑賞に陥ることがなかった。

□言語活動を取り入れた鑑賞であった。子どもたちが「彫刻をこの視点（この部分から）」というように根拠を明らかにしていた点が成果である。

■机間指導で子どもの言葉を見取り、それらを拾い上げ広げていくことで、子どもの本当の声を共有し鑑賞を深める方法もあったのではないか。

■学芸員の解説は本当に必要だったのか。作品の解釈は子どもたちが選択すべきであり、知識として教えられるものではない。

助言者からの講評

□鑑賞の授業の終わりでは「先生、もう１回みたいよ!!」「また、見に行きたいな」という声が子どもたちから出てくることが望ましいが、今日の授業ではそのような声が聞こえてこなかった。この点がやや残念であった。

□鑑賞の学習は、日常の学級経営の中での「友達とのつながり」がつくられていないと、話し合いそのものが難しくなる。交流場面においては、最初に友達に投げかけてみるなど工夫の余地があるように感じた。

「彫刻パンフレット」に寄せられた声

○みなさんが自由に作品をとらえ、書いているのを見て「こういう見方もあるんだなあ」と教えてもらった気分になりました。ありがとうございました。

○みなさんがつくったパンフレット、とても楽しく読ませていただきました。写真も自分で撮っていて、紹介したい部分や見る方向など、写真を通して表現しているのもすごいと思います。

授業を終えて授業者から

今回の授業では、彫刻美術館や学芸員の方との連携が最大のキーポイントであった。学芸員の方には何度もこちらの思いを伝えることで、子どもの見方の広がりや鑑賞の深まりなど、教師に近い視点に立って活動を見守っていただくことができました。「彫刻作品６点の貸し出し」や「彫刻パンフレットを美術館においてもらう」という希望にも快く応じていただき感謝しています。関係者の皆様に改めて感謝の気持ちを伝えたいです。課題となったことは、彫刻に触れた感覚をもっと鑑賞に取り入れることや、子どもたち同士が投げかけ合い、互いの思いをぶつけ合うような追求をすることなどがあげられました。今回浮き彫りになった鑑賞活動での課題は今後の私の研究テーマにしていきたいと感じています。今年の夏の全国大会は、私にとってたくさんの収穫を得る経験になりました。

みらいへのまなざし

題材名

Peace Message Card

授業者　寺林　陽子（札幌市立あいの里東中学校）
助言者　金城　安正（沖　縄：浦添市立浦添中学校）
佐藤　賢司（大　阪：大阪教育大学）

成果と課題

□道徳と関連づけて平和への自分の思いを深く掘り下げたことが高い表現力につながった。

□アイデア段階での交流の設定が、コミュニケーション能力を高めることにつながった。

□自分の表したいテーマの深まりが、他者とのコミュニケーションを生み、それが相手意識をもった表現にもつながっていた。

■他教科や領域との関連させた題材の設定を今後も探っていくことが課題。

■作品を印刷してさらに街頭で配布するなど社会へ発信するようなゴール設定があってもよい。

助言者からの講評

□平和・戦争などについて改めて考えさせられた実践であった。授業の流れが一方通行ではなく、立体的に構成されていているのが素晴らしいと感じた。
デザインとしての機能、アートとしての強さ、それらが加味されることで、より素晴らしい題材になることを期待している。

□美術教師がいない学校が少なくない実態を受け止めなければならない。「美術は楽しい」という心を育てることが子どもたちの成長に大きな力になる。そのためにも、他教科の先生に美術のよさを感じてもらわなければならない。（他教科の先生、美術を教わる生徒が少なくない）今後は、美術のよさを支持する教師を増やしていくことを考えていくことが大きな課題である。

子どもへの手紙から

○授業を参観させていただき、ありがとうございました。下描きの段階でほとんどの人が丁寧に描いており驚きました。本番の制作でどのような作品ができあがるのか見てみたかったです。

○絵を描くことに苦手意識をもっている人もいましたね。得意なことや苦手なことがあるのは当然です。でも、たった一時間のことでも貴重な時間です。描きなぐったり、他の作品を参考にしたりして、形になるものがあるといいと思います。

○普通に生活していたら、一生に何度、平和や戦争について考えることがあるでしょう？テーマに対して真剣に悩み自分なりのアイディアを何とか生み出そうとしているあなた達は輝いていましたよ。そして、このような機会があったことを幸せに思ってくださいね。「why?」とかかれた作品、折り鶴の作品、胸に残りました。ぜひ、完成作品も観てみたいです！

悩んで、悩んで、いい作品にしてください。

授業を終えて授業者から

たくさんの人々と出来事の中で、“わたし”が何を感じ、思い、考え、行動を起こすのか

「“わたし”を創る」という大会主題を、私自身が授業を組み立てていく中で強く意識させられました。それは、授業づくり・指導案づくりで扉の先生方に私の思いを汲んでいただき、よりよい授業に発展させていただけたことと、授業者のみなさんから刺激を受けたことにあります。２学期を迎え生徒たちの作品が完成した今振り返ると、アイディア段階で意見交流をした生徒と同じことを、私も授業づくりで体験させてもらったように感じています。

今後も他教科と関連付けつつ、美術を通して様々な事柄について生徒たちと共に感じたり考えたりしていきたいです。大変貴重な経験をさせていただき、今後の糧となりました。本当にありがとうございました。

教師のまなざし

題材名

にじいろの もりで あそぼう

授業者　三浦真奈美（札幌市立いなづみ幼稚園）
助言者　坂本　行正（北海道：大地太陽幼稚園）
　　横　　英子（千　葉：淑徳大学）
　　平田　智久（埼　玉：十文字学園女子大学）

成果と課題

□事前の交流で２年生に親しみをもつことや、当日までの遊びで色水づくりの楽しさを知ったことなどが遊びの必然性をもたらし心の発動につながった。

□つくり方を教えたり、難しい部分を手伝ったりといった２年生のかかわりが幼児の心に「あったかい」をもたらし、みんなでにじいろのもりをつくったという満足感を共有することにつながった。

■ロープに吊り下げた色水を滑らせるなど、新たな遊び方を思いついた幼児もいたが遊びとして広げることができなかった。幼児の発想を生かせる環境があるとよかったのではないか。

助言者からの講評

□一人一人が寄り道をし、発見しながら活動に取り組んでいたことが今回の成果である。このような形の幼小の交流が行われたことは今後の取組の示唆となるであろう。

□日頃の遊びの積み重ね「あったかい」学級経営が本日の子どもたちの姿につながっていると感じた。

□ねらいに縛られることなく、幼児の発想を積極的に受け入れるべきである。発想はひとりひとりそれぞれちがっていることを理解し、幼児の素晴らしい発想をよく見取る教師であってほしい。また、今後の研究が幼小交流をする際には、ぜひ、分科会を合同にして互いの思いを語り合うべきである。

子どもへの手紙から

○色っていろんな色があるんだね。でも、誰かが「つくってみたいな！」「どんな色ができるのかな？」って、思わないと作れないんだよね。今日はみんなのつくってみたい気持ちがたくさん出ていてとてもきれいなもようができたと思います。感動しました。
色ができていくのと友達をつくるのとおんなじかなって思いました。

○とっても楽しくて、わくわくした遊びを体験できましたね。宝物のような時間を過ごしたみなさんはラッキーでした。先生もいっしょにやってみたくなっちゃうほどでした。さあ、今度は何をしようかな？2年生のみなさん今日は、幼稚園の子どもたちにみなさんの大好きなことを分けてくれてありがとう。一緒にすることで新しい発見ができた素敵な時間でした。

○今日は楽しい"にじのもりであそぼう"を見せてくれてありがとう。森でじゅんびをしているのを見て、とてもわくわくする気持ちがわいてきました。わくわくしたり、ドキドキしたりしながら、「にじいろのもり」にへんしんしていくところがとても素敵でした。ようちえんの子も小学校のみんなも、楽しいにじの森ができてよかったですね。

授業を終えて授業者から

子どもたちの「一緒に遊びたい」「お姉さんたちのところへ行ってみたい」という思いを大切にしながら、進めてきました。本時までに、インターネットのskypeを使って2回交流してきました。その中で、2年生が色水を作って観西の森を色水で飾っている様子を見たことが刺激となって、園内中に色水を飾ることを子どもたちが始めました。

本時では「一緒に」という言葉をキーワードに授業を進めました。表現に特化して遊びを展開することがあまりないため、一緒に授業をした吉伊先生と相談しながら進めてきました。2年生とのかかわりを中心に授業を考えてきたため「色水どこにかけたの？」「楽しかったこと教えて？」など、子どもたちが2年生と一緒に活動したことに興味が向くようなかかわりになるように心がけ授業をしました。

幼小の連携ということがいわれていますが、接続の仕方が大事であることがよくわかりました。またインターネットを使うことで離れた地域との交流が可能になり、より交流が身近になると感じました。最後に、授業づくりにかかわっていただいた多くのみなさんに感謝しています。ありがとうございました。

題材名 にじいろの もりで あそぼう

授業者　吉伊　宏子（札幌市立幌西小学校）
助言者　今　　裕子（北海道：顧問）
　　浅川　　徹（山　梨：北杜市立日野春小学校）

成果と課題

□事前の取組によって、幼稚園の子どもたちが期待感をもって当日を迎えられていた。事前の準備と出合いの工夫に成果があった。

□第一段階はペットボトル。第二段階は金魚の袋と、段階を追って教師側が提示しているのが良かった。金魚の袋に色水を入れるとき、自然とかかわりが生まれていた。色に関する感性を磨くことにつながった。

■色について、同じ色でも見方によって違う色に見えるところもあったので、観るという活動を含めると成果はあったが、光と色の関わりについて感性をもっと磨いていかなくてはならない。

・「きれい」という言葉以外もたくさん用意すべきだった。

・ふり返りでは、もっといいところを見つけられないかと考える時間が必要。

助言者からの講評

□幌西の森は30年前から地域の方や子どもたちにとって特別な森。その特別な場所に幼稚園の子どもたちを呼んで行った授業だった。幼小で距離を超えた授業づくりができた。双方向的に内容を確かめることもできた。そのために、ICTの活用にも強くなっていくことも大切。子どもたちは、見ながら、作りながら感じていく。人と人とのかかわりを大事に取り組んでいた。

□造形遊びは、指導者が何もしないのではなく、共通事項の色などに視点を置いて授業していくことが大切。2年生が幼稚園の子に声かけをしようとしていたので、子どもたちは心から楽しんでいなかったかもしれない。展開としては、今回の流れでよかった。色の見え方では、光を通したもの、土に置いたものなどいろいろあった。工夫されていた。

子どもへの手紙から

○幼稚園の子と一緒に試すと新しい発見ができて、ステキな時間でしたね。皆さんの目がキラキラしていて、とってもステキでした。みていてわくわくしました。

○園児さんと一緒にステキな幌西の森をつくりましたね。やさしく園児さんに声をかけている姿がかっこよかったですよ。

子どもたちのつぶやきから

授業を終えて授業者から

今回の授業では図工が好きな子も苦手意識を感じていた子も全員が楽しんで取り組むことができました。子どもたちにとっては字を書く道具であるチョークを使って色水をつくることが驚きでもあり、楽しい活動になりました。自分のお気に入りの色水をつくることで、色のちがいや光を通す美しさを感じ、並べ方や吊るし方を考えながら、色や形の造形的な要素を学ぶ題材になりました。

また、幼稚園の子どもたちと一緒に活動するためにskypeを利用して交流を図り、当日は声をかけたり手伝ったりしながら、あったかい活動になったと感じています。ただ、活動場所が広く人数も多かったため、なかなか全員の活動を把握できず、評価しきれなかったことが残念でした。

題材名

大切な相手へ
～色のおもてなし～

授業者　則友　冴子（札幌市立札苗北中学校）
助言者　田中　圭一（大　阪：堺市教育委員会）
　　野切　　卓（北海道：札幌市教育委員会）

成果と課題

□生徒が主体的に考え、実践しやすい色の学習となった。意欲的に取り組み、扉の考えである「教師の手だて」が感じられた。子どもが意図をもって色を選び、組み合わせていた。実生活に結びついた学習となった。

□テーブルに向かい合って活動することで、子ども同士で影響しあいながら工夫を生んでいた。また、気付きや子どものつぶやきを教師が丁寧に拾うことができていた。

■大切な相手がいったい誰なのか、じっくり考えさせるために、教師側が押さえておくことが必要である。相手意識をもった取組の大切さ。

助言者からの講評

□カラーコーディネートが中心のわりには授業の内容が膨らみ、他の要素が出てきた。生徒はどんどん発展させていくので、ゴールをどこに決めるのかが難しい。ねらいと授業内容との整理がもう少しあれば子どもたちにねらいが落ちやすかったのではないか。色の勉強と表現を分けて実施することが多い中で面白い取り組みだった。

□人のことを思いやる、人とのふれあいを美術に置き換える、伝達のデザイン。日本の伝統文化の中に備わっているおもてなしの心。日本の茶の文化など日本の伝統文化に繋げて発展させ、社会科や家庭科、そして生活の中に美術が入っていくなどこれからの発展が様々に考えられた。全国の先生からの声が聞けて良かった。

子どもへの手紙から

○食材の色、食べ物の色などを考えてお皿に並べることで、「おいしそう！」と相手に伝わる工夫を考えていましたね。「和っぽいね」「うまそう」を話しながらつくっているみなさんの心がとてもあったかでした。一人一人のテーブルコーディネートがとても素晴らしかったです。

○今日は夏休みにもかかわず授業を見せていただきありがとうございました。君たちの授業に対するひたむきな姿勢と取り組みにはとても感心させられました。今日の授業は作品交流ということでしたが、一人一人の気持ちや考えを言葉として伝えていました。

授業を終えて授業者から

もとはと言えば単なる自分一人の思いつきのようなあやふやな形であった題材でした。それが多くの先生方と共に練り上げられ、子どもたちが取り組み、授業と言う形になりました。そこから全国の先生方からアイディアやご意見をいただいて、更に発展していく…。私の中でこの授業はまだまだ続いていく気がします。他の地方ではどう実践するのか、この教科と組み合わせればどうか…。また何年も経ってから、時代に合わせて変えていくところ等、題材自体が様々な人たちの発想のもとに形を変えて子どもたちの心に残っていく可能性を考えるとわくわくします。実際、私も、この度の研究授業を終えてから、いただいたご意見を元に鑑賞の授業を行ったり、状況に合わせてワークシートを作り直してみたり等、実践していく中で生徒の反応や成長が感じられることが楽しくて仕方がありません。今回の研究授業が無ければ、こんなにも多くの方々から学べる機会は無かったと思います。ご協力いただいた方々、お越しくださった方々、本当にありがとうございました。

教師のまなざし

題材名

高校の美術科のあり方と授業

授業者　齋藤　　周（北海道札幌旭丘高等学校）
助言者　大坪　圭輔（東　京：武蔵野美術大学）
　　藤江　　充（愛　知：愛知教育大学）

成果と課題

□生徒たちの作品を持ち寄りそれぞれの学校での実態を交流することで、美術教育が生活を豊かにする力になることを伝えている。

□課題の中に「犬を描いて…」など、自由度の広いテーマを与えることで、今まで経験してきたことをもとに、発想を巡らせる。この時間生徒たちは自分の作品にこだわり、よりよくしたいという願いを強くする。

■スキルという発想がより重要になってくる。生徒たちは、もっとうまくなりたいという欲求がある。どのようにスキルを身に付けさせるかが課題である。

助言者からの講評

□「情操を豊かにする」という言葉があるが個人的には抵抗がある。震災以来日本は「情操」を求めている。そこを考えると、人々が心の安定感を求めている時代にあるといえる。そう考えると、高等学校での美術教育を今一度考え直す必要があると考える。

□学生の多くが教員免許を取得している。高校の免許はとったが採用がないので、再度聴講生として中学の免許を取りに来ている。「走る場面のコマ取り」をさせると、なぜ、写実的に描かなくてはならないのかと学生は感じ取るようだ。必然性がないのに「見た通り描きなさい」というのであれば、子どもたちの心が動かない。美術は人生の課題にぶつかったときに、そこで培った力が役に立っていく。

持ち寄った作品を眺めながら…

○「輪郭線」でとらえようとしている傾向が強いのではないか。ものをとらえる構造を意識させると視点が変わる。自分の学校の生徒は自信がなく、制作についても何かをよりどころにしている。「輪郭ではなく、軸（骨）からとらえるように指導している。

○「自分はこんな風に描きたかったんだ」ということが伝わってくる作品にAをあげている。「手を抜くことの意味のなさ」も伝わる。最終的に3月は「みんなそれぞれだけど…みんなすごいね」という気持ちになれる。

授業を終えて授業者から

私は、美術という教科を通して、日々生徒と共に勉強させてもらいながら授業を実践してきました。今回の全国大会という貴重な機会に参加させて頂き、あらためてたくさんの人に支えられ、授業が成り立っていることを再認識しました。毎日の生活の中で見落としがちなことや時間をかけて検討していくこと、そして新しい発見がありました。これからは、今まで以上に物事に対する自分の視点を多くもち、他者からのアドバイスに耳を傾けることを基本に、教材と生徒と向き合う時間を大切にしていきたいと感じています。ご協力して頂いた方々にはこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

岡山会場

こどものまなざし

題材名

土の中たんけんたい

授業者　高橋　梓（札苗幼稚園）
助言者　藪田　一子（大　阪：成蹊短期大学）
　　杉浦　篤子（北海道：藤女子大学）

成果と課題

□子どもの気持ちが伸び伸びと表現できる活動とは何かについて、皆さんと交流しアドバイスをいただけたことに成果を感じている。

□子どもたちを感動させる為の表現方法や教師の言葉のかけ方の工夫について考えることができた。

■子どもがお話の世界に入り込み最後までイメージを共有していく工夫の難しさを感じた。

■子どもたちの発達に合わせた造形活動の題材の提示の仕方が課題となった。

助言者からの講評

□日頃から子どもの心が動く活動をしていることがうかがえる。今回の題材にあたり、言葉のイメージを描画で表現することが幼児にとっては難しいことであったと感じられる。幼児教育が小学校へつながっていくこと考え、どんな学習につながっているかを考えていくことが大切である。

□作品は素晴らしいものになっている。日々の保育でダイナミックな活動をやっていることがうかがえる。遊んでいるうちに、土の中なのか外なのかを子どもたちが見失っていたのではないかと思われた。教師が活動の意図を把握して進めることが大切である。子どもたちにさせるだけではなく、教師自身が描く、つくる、試すことで、子どもの目線で活動を行うことが重要である。

子どもへの手紙から

○とてもすてきな　土の中のせかい!!　いっしょに入ってたんけんしたくなりました。

○とってもたのしそうに土の中をたんけんしていましたね。おうちやびょういん　すてきなおしろ…、土の中っておもしろいね。みんながつくったまちはせかいでひとつだけ☆とくべつなまちだね。

○みんなアリさんになってとっても　たのしそうに土の中をたんけんしていたね。
土の中のせかいをあんないしてね。

授業を終えて授業者から

公開授業後、子ども同士がお互いに顔を見合い会話を楽しみながら、絵を描いている場面がたくさん見られました。「土の中たんけんたい」の遊びを通して、イメージを共有させる楽しさや心地よさを体感できたのかな、と嬉しく感じています。今回の造形活動において、子どもたちが意欲的に取り組めるための導入や活動内容の大切さを再認識し、その中で今後の課題も多く見つかりました。また授業をつくりあげていく中で、司会者の先生をはじめ多くの先生のアドバイスーつーつが自分の勉強にもなり、授業者として参加できたことに感謝しています。分科会の中でたくさんお話くださった先生方のお話も心に受け止め、今後に生かしていけたらと思います。

円山会場

こどものまなざし

題材名

思いとび出して

授業者　藤岡　真弓（札幌市立手稲西小学校）
助言者　畑　　俊明（北海道：教育センター）
　　栗栖　恒久（広　島：広島市立大町小学校）

成果と課題

□どの子も真剣に取り組み、自分の表現を探している姿が見られた。

□基本形を一つに絞ったことがよかった。発展があり、イメージや形のバリエーションが広がりやすかった。紙を加工してつくりかえていくおもしろさがよかった。

■イメージしているものを表現していく技術をどのように伝えていくのかが課題となった。

■蛇腹のように、右から左へとどんどんお話がつながっていくようなものにすると、さらに思いが広がったのではないか。

助言者からの講評

□色を選べる楽しさがあってよかった。作品はきれいで終わる必要はない。もっといろいろあっていい。細かな技術にとらわれず「うまく」できるのではなく、「自分を出そう」に、していくことで子どもたちはどんどん生き生きしていくのではないかと思う。

□もっと“わっ”にするために見つける表し方を考えるというのはよかった。そのためにはもっと開いたり閉じたりして確かめる姿が見たかった。素材が限定されていたことがいい。限られた中で想像を広げていくことが大切である。また、技術は自分の表現にあったものを身に付させていくことが大切。教師側がそれを見極めてあげたい。今回なら紙の目の指導があってもよかった。

子どもへの手紙から

○みなさん今日のこの時間だけでなく、これまでもちゃんと考え工夫して取り組んできた様子がよく伝わってきました。何かひらめいた顔をして、黙々と取り組むみなさんの姿が素敵でした。

○みなさんが授業の終わりに「えーっつ」といった言葉がみなさんの“わっ”が素敵なものであることを表していたと思います。これからも、一人一人が熱心に取り組み、自信をもって頑張ってほしいと思います。

授業を終えて授業者から

今回の題材に取り組んだ子どもたちの感想は「難しいところと楽しいところがあった。元に戻っていく形がすごいと思って、工夫してできた」など、この題材を楽しんでいたことが伝わってきました。友達の作品に対しても、私とはちがったお話になっている“わっ”がすてきだと思った。自分とは違う視点の作品のよさをしっかりと受け止められる子が増えてきました。また、公開後に行った授業では、「“わっ”が足りないんだけどどうしたいのかなあ…」「いい？見てて？輪になってる？」などもっとこうしたいという意欲が見られたり、お互いに作品を見合って確かめたりしている姿がよかったです。楽しくできた授業になりました。子どもたちが発見でき、楽しくつくり上げる授業になりました。今後もどの子も取り組むことができる題材になるように工夫したいと思います。

円山会場

こどものまなざし

題材名 **カラフル ワンダー ホール**

授業者　宮田　珠世（札幌市立円山小学校）
助言者　鈴石　弘之（東　京：元全造連委員長）
　　平尾　隆史（京　都：石田小学校）

成果と課題

□周りの環境を変える楽しさがあった。活動への憧れが、活動の深化や自信につながっていた。

□素材感を感じさせるためにポリシートに絞ったのはよかった。その成果が、子どもたちの姿として表れ素晴らしかった。

○様々な発見や気づきの素晴らしさ

○みんなで空間を創造するよさ

■他の表現方法や材料で、エントランスホールをより変えていくこともできたのではないか。

■子どもたちの中に、形・色・透けるという意識を持続させる工夫が必要。

助言者からの講評

□子どもはすごくよかったが、活動をやり過ぎていた。「素材」は子どもたちが手に取った段階で「材料」となる。
題材との「出会い」は大切だが、とても難しい。そして、その力が題材を通して一貫のものになっていることが必要である。
また、シートの発色が鈍かった。もっと鮮やかであると、子どもも色に囲まれて夢中になることができた。

□京菓子と和菓子のちがい。京菓子は季節感や空間を意識してつくる。造形活動も同じように感じる。その場にあった表現や材料選びが必要であった。図画工作科として育てたいことを明らかにしたい。
～感性を大切にしていかなければならない。また、図画工作を通して他の教科にどう広げていくかを考えていく～

子どもへの手紙から

○とっても素敵なエントランスホールができましたね。みなさんが生き生きと表現することを楽しんでいたことが素晴らしかったです。外での活動や色ぬりなどをしているみなさんの学習の様子も見てみたかったです。

○みなさんのつくった作品のおかげで、エントランスホールがとてもカラフルで楽しい場所になりました。さらにもっと嬉いていたのは、エントランスホールをワンダーな感じにつくっているときのみなさんの笑顔でした。美しい空間と元気をたくさんくれてありがとう!!

○ただのビニルシートなのに、こんなに楽しいことができるんだなあと思いました。それに、みんなで力を合わせてエントランスホールが楽しくなるようにできたことが思い出です。

○太陽の光で、ビニルシートの影に色がついたりするのがきれいでした。

○いろんな色がいっぱいあって、いつもと違うエントランスホールになったのが楽しかったです。

子どもの感想（振り返りカードより）

授業を終えて授業者から

全国大会の授業から約２か月。時が経つほど、自分の中で課題がずしりと重くのしかかっていることを実感しています。子どもの側に立つこと、子どもの思考に寄り添うことの難しさを痛感しているからです。今回の取組では、子どもたちの姿は素晴らしかったとたくさんの方からお言葉をいただきました。実際、飽きることなくどこまでも造形活動に没頭していたと思います。たくさんの「きれい！」「おもしろい！」といった気づきや感動も生まれていました。写真で振り返ってみると、子どもたちは表現と鑑賞を行き来しながら「もっと、○○してみよう」と、思考を連続させていたことがわかりました。しかしながら、本時での「美的な価値の質」に課題が残りました。

円山会場

こどものまなざし

題材名

感じて語ろう

授業者　多田　絵美（札幌市立西岡中学校）
助言者　工藤　雅人（北海道：北海道教育委員会）
　　牧井　直文（東　京：中野区立南中野中学校）

成果と課題

□生徒の興味関心を引く作品を提示・投げかけをしたことで、自分たちで主体的に価値を見いだしたり、生み出したりする姿を見ることができた。

□グループトークを通して、子どもたちが自分の考えを主張し、認めてもらう体験をすることができた。

■子どもたちの心を大きく発動させる、鑑賞作品を選定することが重要であることを改めて感じた。

■グループトークにおいて、効率よく話し合いをさせるための投げかけのひと工夫が課題であった。

助言者からの講評

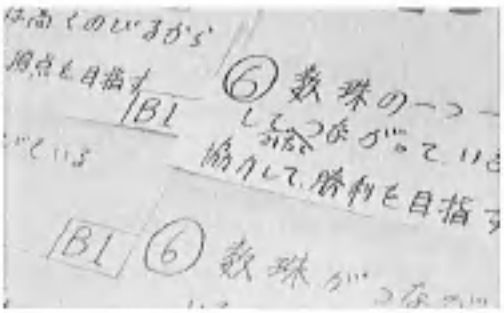
□新学習指導要領の内容をふまえて、様々な要素が含まれている題材であった。教師が指導の目標を明確にすることと、生徒が話し合うための視点として、共通事項＝造形要素を掘り下げることが大切である。

□時間の制約などで生徒が考えをまとめきれないということもあるので、グループトークでよりよく話し合いをさせるための工夫が必要である。

子どもへの手紙から

○みなさんの授業を見て、とても驚きました。すばらしかったです!!グループでの話し合いの中で、色々な事を発見していく姿が印象的でした！夏休み中にもかかわらず、よい授業をしてくれて、ありがとう!!

○難しい問いかけに対して、集中して考え、熱心に発表し、話し合う姿、素晴らしかったです。
多くのギャラリーがいる中ですが、先生と共に授業をつくり上げていこうという気持ちが伝わってきました。



授業を終えて授業者から

「４つの美意識に流れる思いとは？」という、大人でも難しい問いかけに、自分の思いを深め、話し合い、認め合い、時には反発しながら自分たちの答えにたどりつこうとする子どもたちの姿に、私自身、美術教育の可能性と意義を改めて感じることができました。また、中学２年生にとっては、非常に難しい題材でしたが、子どもたちがこの授業で日本の美意識と出会い、今後出会うであろう様々な日本美術のよさや深さを身近に感じるきっかけにしてくれればいいな、という気持ちも込めて授業つくりをしました。

今回、このような機会を与えていただき、多くの方の支えとご助言で、授業をつくり上げることができました。この場をかりて心からお礼を申し上げます。

円山会場

こどもの まなざし

題材名

My Life+ ～土に思いをこめて～

授業者　細川亜矢子（札幌市立米里中学校）
助言者　坂本　宏（大　阪：大阪市立東淀中学校）
　　石谷　正美（北海道：顧問）

成果と課題

□「自分の生活に華やかさをプラス」という考え方やその取組がよかった。題材に込められた思いが生徒たちにも伝わっていた。

□花を準備しておくことで、実際に生けて様子を見ることができるようになっていた。「試す」時間が保障されることで自分の作品を見直すことができた。

■粘土に集中するあまり、花とのかかわりを考えるところまで意識できない生徒への対応を考えなければならない。

助言者からの講評

□友達との関わりの時間をつくるとよい。グループ形式での学習スタイル、ワークシートを見合う場の設定などの工夫をすることが必要であった。生徒主体ということを考え、授業にメリハリをつけるとよい。

□導入や教室環境など、花器づくりに意識が向くように工夫されていた。導入時に、「どこで止めるか」、「どういったところまで進んだら次のステップに意識が向かうのか」などを予告しておくと、生徒が見通しをもって活動できたのではないか。

○最初はたくさんの花を入れて華やかに見せようと思ったけれど、今日、花を入れてみてやっぱり１本をきれいに見せる花器にしたいと…と思いました。

○花器の足の部分を変えて、より花がすっと立っている感じを出したいと思った。

子どもの感想から

子どもへの手紙から

○粘土に取り組み一人一人の表情がとてもよかったです。

○ものをつくりだすということは楽しいことであり、とても大切なことだと思います。

○たくさんの先生が見ている中短い時間でよく形にまとめ上げることができましたね。

授業を終えて授業者から

たくさんのことを考えるきっかけをいただいた研究大会だったと思っています。いつも授業づくりに協力してくださった方々、あたたかく支えてくださった方々、私の授業を見てくださった方々、そして学級の子どもたちに…、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の授業は“自分の生活にプラスを…”と、いう考えを大切にして、“生活につながる制作”を意識しながら授業をつくりました。しかし、自分の考えの広がりをもたせるような交流の場づくりをする、という点では多くの課題が残っています。一人一人の課題の見取り、声掛けについても十分でなかったことに課題を感じています。生徒たちが自信を持って取り組める様に「自分の思いを大きくふくらませる場」のある授業をつくっていくことを今後の目標にしたいと思っています。

「できた！」という達成感、そして「次は○○したい」という前向きで明るい気持ちが「豊かな日常生活」につながっていくと感じています。

円山会場

みらいへのまなざし

題材名

おもいを言葉に
～墨からの造形～

授業者　川内亜矢子（札幌市立手稲中学校）
助言者　中島　健朗（北海道：北海道教育研究所）
　　鷹野　　晃（山　梨：北杜市立須玉中学校）

成果と課題

□生徒一人一人が生き生きと表現する姿を実際に見て、豊かな発想で多彩な表現をすることができる授業であった。
□筆で表現するという部分を自分の授業にも取り入れたいという声があった。
□資料としての生徒作品の完成度も高く子どもの能力を高める実践であった。
■同じ題材を続けるということで、３年間のカリキュラムの中の位置づけをしっかりとさせる必要がある。生徒の興味・関心という視点ではデメリットもあるのではないか。

助言者からの講評

□授業にも今大会にも、数々の発言の中にも晴らしさ（かっこよさ）を感じた。自分の表したいことが少しずつ深まっていくことが伝わってくる授業だった。子どもたちも自分のしたいことがわかり、教師もねらっていることがはっきりしていた。本時の指導事項として考えると、「筆はこび」が評価のポイントと考えることができる。主題をどのように表現していくかを見取っていくことで評価することができる。また、ICTを活用することで生徒の考えをみんなに伝えることができる。
□「いい感じだねえ」という言葉に生徒がよろこんでいた。先生の人柄が伝わってくるようだった。「美術って何の役に立つの？」という質問があるが、この授業の生徒の姿がその答えを物語っている。

子どもへの手紙から

○「紅」を表そうとした○○さん、墨をたらして書いたその柔軟な発想はすばらしい。とにかく手を動かしてやってみる行動力に感心しました。友達の作品のよさを言葉にして表せるのもすばらしいことです。皆さん制服を汚しながらも頑張る姿が印象的でした。

○「魂」を表そうとした○○君、「強さ」をかすれさせることでうまく表現していました。「創」を表そうとした○○君は、落ち着いていろいろな表現にチャレンジしていた姿が印象的でした。今後のデザインなどでは、もっと素敵な作品をつくっていくのでしょうね。

授業を終えて授業者から

生徒は中学生としての今、どんな「おもい」を込めてどの文字を選ぶか、時間をかけて真剣に考えていました。水墨画の運筆の練習を生かし、豊かな発想で枠にとらわれない自由な表現を楽しみ、日本の伝統や文化である墨や筆のよさを再認識することができる題材だと思っています。一年一年大きく成長する中学生として、以前の自分の作品と比較することができると考えます。文字の選択では、視点の広がりや深さなど心の成長に気付き、配色や着色の段階ではその技術面の向上など、自己の成長を確かめるとともに、自分の未来への可能性を意識することができます。試行錯誤を繰り返し、たどりついたこの授業ですが、全国の多くの方々に知っていただき嬉しく思っています。

みらいへのまなざし

題材名

旅するムサビ in 札幌 ～featuring 北教大～

授業者　武蔵野美術大学生　北海道教育大学生

助言者　三澤　一実（東　京：武蔵野美術大学）

南部　正人（北海道：北海道教育大学旭川校）

成果と課題

□感じることが資質能力であれば今回の授業ではある程度成果があったと考えることができる。

□子どもたちが大人になるにつれて段々ものを言わなくなるのは「正しい答え」を求められるからではないか、その点美術は自由度があり「みらい」につながる自信となっている。

■「旅するムサビ」は非日常である。大学生がもっと教育現場に参加できるように声をかけ広げていくことが必要ではないか。

助言者からの講評

□小・中学校から是非、声をかけていただきたい。この取り組みは、学生が成長することはもちろんのこと、受け入れていただいた学校や、見ていただいた教師も変わっていくと考えている。日常の授業をしっかりと行うことで、「旅するムサビ」のような異質なものがより生きてくる。

□子どもたちが真剣で作品を見て語っていた。その表情は、みんな笑顔だったことが、参観したみなさんにとって「参りました」という気分になったのではないか。教員養成のためには今回のような授業の取り組みが大きな意味を持っていると感じた。また、美術教育を通して「生きる力」が身に付いていくことも実感することができた。

子どもへの手紙から

○円山小の6年生のみなさん、お疲れ様でした。みなさんが感じたことお話していたことが、とても発想豊かで、繊細かつ大胆で…、本当にステキだなあと思いました。みなさんから、たくさんのアイディア、パッションをいただきました。

○みなさんの感じたことが、人と違っても「みんな違って、みんないい」と思います。感じたことを伝えることを恐れず、これからもどんどん自分を伝え、友だちを知りお互いを認め合いながら、残り少ない小学校生活を思い出いっぱいの充実したものにしてください。

授業者みなさんから一言

□子どもたちのイメージが豊かさにおどろいた。自分の作品の見方にハッとさせられました。

□作品があるだけで、発言がどんどん出てきて、子どもの力に感心させられました。

□子どもたちの説明が、すごくて驚かされました。

□活発な意見が交流されているのに、時間の制約がありまとめようとすると子どもたちの目が曇ってしまったように感じました。

□楽しみみながら鑑賞してもらうことができたので、うれしかったです。「図工が苦手だったけど好きになった」という意見がうれしかった。

□子どもたちと心が通じたように感じました。少ししゃべり過ぎてしまい、子どもたちの意見を誘導してしまった。

□子どもたちの率直な意見がうれしかったです。子どもたちの見ているところが自分と違っていることを感じました。

□今日は貴重な体験でした。自分よりも子どもたちの方が創造力が豊かだと感じました。

□意見は話さない子どもたちも考えを持っていることが分かりました。

教師のまなざし

題材名 **もく木 トントン わ～くわく**

授業者　橋本　祥子（札幌市立あやめ野小学校）
助言者　長谷川辰夫（大　阪：長吉南小学校）
　　名達　英詔（北海道：北海道教育大学旭川校）

成果と課題

□「もく木のかみさま」というストーリー仕立ての設定が子どもの意欲を喚起していた。自然木と釘の材料の準備をしっかりできよかった。２種類の材料に絞り込むことで、発想を広げることにつながった。

□図工好きな子が多かったが、ますます大好きになったようだ。曲がった打ち方や、横に向いた釘でも、失敗ではなく新たな発想へとつながっていたのが、立体作品のよさだった。

■「わくわくをつくろう」という提案は、想像の幅を広げ柔軟さをもっているが、逆に幅の広さが難しさにもなっていたようだった。

助言者からの講評

□お話をつくって、そこから題材に入ることは意欲喚起の上で大切であることを再確認した。木材・釘の用意など、教師の苦労があって子どもたちの楽しい表現がある。一人一人の困っているところをしっかり読み取ろうとするあたたかい関わりを感じる授業だった。

□カラー釘について、作品を自分のイメージに近づけるのに有効な手段だったが、どう使おうか悩む子もいた。悩みを読み取って、その子に応じた手立てを考えておくことも必要だった。実際「わくわく」できていない子もいたのではないかと感じた。子どもと語り合いながらわくわくのポイントを探っていくことが大切。

子どもへの手紙から

○おもしろいものをそうぞうしたり、くぎうちのうで前をみせてくれたりして、楽しい学習を見せてもらいました。どうもありがとうございました。ななめやよこにくぎをうつのはむずかしくはありませんでしたか？みんな上手だったのでびっくりしました。仕上がりまで、作品をだいじに作ってくださいね。

○みなさんの「もっとわくわく」するようにしたいという気持ちがつくっているみなさんの姿や作品から伝わってきました。木の形を生かしながら楽しい作品を考えていましたね。くぎを打つのがちょっと大変だったかもしれないけど、カラーくぎもうまく使ってとてもきれいな作品になりましたね。

授業を終えて授業者から

大きな自然木、カラー釘の準備には苦労したが、やってよかったと思える子どもたちの表情でした。（木の入手に協力してくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。お世話になりました。どうもありがとうございました。）

「『もく木のかみさま』から手紙が届いた」と、いう設定を子どもたちは非常に楽しんでいました。「次はなんだろう」と、毎回の授業をわくわくさせることにつながっていったと思っています。自然材との出会い、釘打ち、カラー釘の使用へと授業を進めていきました。どれも、これまでに使ったことのない材料ばかりだったのですが、段階的に登場することで、適度な難しさになりよかったと感じています。

一方、授業の中では見取りされない部分をさまざまな方法で見取り、子どもが感じる困難さに寄り添っていくことが必要と、今振り返ると感じます。また、「釘打ちが楽しかった」という子どもの感想から、本授業の領域がＡ表現(1)でよかったのか考えさせられました。

円山会場

教師のまなざし

題材名

ぐるぐるワールド

授業者　矢野　宣利（札幌市立百合が原小学校）
助言者　鈴木　陽子（東　京：五本木小学校）
　　宮崎　祐治（佐　賀：開成小学校）

成果と課題

□環境準備がよかった。子どもの全身での活動や表現と鑑賞の一体化、空間演出の面白さなどが見られた。

□材料の準備や会場準備に教師の細やかな配慮が感じられた。そして、教師の声かけが自然であったかい。子どもたちと楽しくかかわっていたのがよかった。

■題材自体を「造形遊び」に再構成し、もっと自由に子どもに表現させても面白いのでは。

■空間の変容を実感できる鑑賞の場や子ども同士で感動を共有できる交流があるとよかったのでは。

助言者からの講評

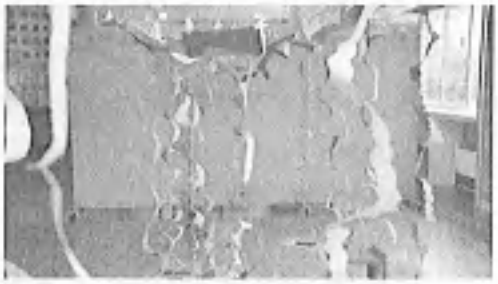
□造形活動では、子どもたちの新しい一面を見つけることのできるような授業を目指したい。「ぐるぐる」は先生のイメージが強かったのではないか。もっと子どものイメージに寄り添う必要がある。そして、子どもに寄り添い一人一人に応じて場面をつくりかえてもよかったのでは。

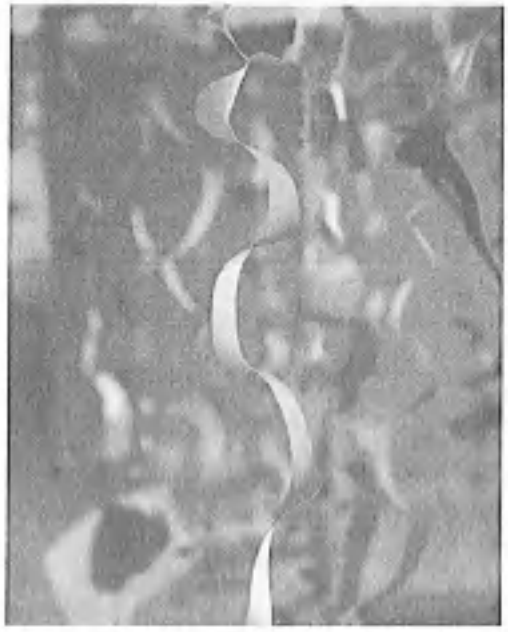
□平面から立体への変化など、題材として面白い。２色のカラードフォルムがとてもきれいだった。作品を２・３個つなげ始めた工夫を全体に広げていけばよかった。また、造形遊びで実践してもよかったのでは。導入時、“技法”を提示するだけではなく、“目標やねらい”を子どもに意識づけさせるための教師の意図的な手立てが必要である。

子どもへの手紙から

○暑い中、夏休みの時間を使って勉強を見せてくれてありがとう。器用にはさみを動かしていろんなぐるぐるをつくり、自分の世界を上手に表現することができたね。ワークスペースが、ぐるぐるワールドになった時には、拍手を送りたい気持ちでした。

○カラフルな色画用紙から生まれる「ぐるぐる」の世界は、とても鮮やかできれいでした。友達とぐるぐるをからませたり、さらにぐるぐるを作り足したりと、色々な工夫があってとっても楽しかったです。





授業を終えて授業者から

「形や色にこだわりをもってじっくりと表現活動に浸らせたい」

「形や色から豊かにイメージを広げてほしい」そうした願いをもち、本題材を設定しました。

本時では、活動場所をワークスペースとしたことで、開放的な空間の中で子どもは全身を使いながら表現活動を行うことができたと考えています。また、同時に友達の表現が常に見え、交流も自然に行うことのできる鑑賞の場としても機能していました。

「教師の扉」の授業者として、多くの先生の助言をいただきながら授業づくりを行ったり、実践したりすることで、子どものよさを引き出す教師の役割の重要性を改めて実感することができました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

教師のまなざし

題材名

みてみて発見！
日本の美～仏像編

授業者　市川　雅基（札幌市立屯田北中学校）
助言者　佐々木　寧（北海道：北海道教育大学釧路校）
山崎　正明（北海道：千歳市立北斗中学校）

成果と課題

□今回の授業で気を付けたいポイントを２つに絞ったことで、子どもたちの言葉を拾いながら共有することができた。

□仏像に興味しめさないと考え「これが好き」という感覚的な思いで学習を始めたことがよかった。

■作品（仏像）を４つのグループに整理し子どもたちが鑑賞する観点としたが、この分け方が本当によかったかを再度考える必要があるのではないか。

■仏像ということで、宗教的な側面、また文化財としての価値など、美術（彫刻）作品としての鑑賞以外にも配慮しなければならないことがあるのではないか。

助言者からの講評

□日本の美、ということであったが「祈って、形になって…」いろいろな地域にまたがって美術の文化を形成していることを学べるとてもよい題材であったように思う。そう考えると、社会科ではなく美術で扱うのかが明確になる。昔から、人の思いや願いが形になっていることを知ることが、今自分たちが制作活動をしていることにつながる。

□市川先生の授業のスタイルがシンプルで構成が素晴らしい。また、環境の構成が子どもたちの意欲を喚起する仕掛けになっている。また、グルーピングすることで、互いに見比べる視点が自然と子どもたちにできていったように思う。子どもたちのつぶやきをつないでいくことで、鑑賞になっていく。

子どもへの手紙から

○仏像の写真カードをしっかり観て、班員が協力しながら仏像に関して様々なことを発見したりしている姿は、感動！感動！です。観る力、発信するパワーも感じました。今後、立体彫刻の制作に生かしていってください。仏師がつくりだした気持ちになっているのは、すばらしかったです。

○普段からこんな感じの授業なのでしょうか。みなさん、積極的に聞き、話し、発表できるところはすごいなあと思います。先生の授業も素敵だし、少し仏像に興味を持つことができたのではないでしょうか。私も仏像が好きでよく鑑賞の授業で活用していますよ。整理することで、今まで気が付かなったことに気を向けていくことができるようになりますよ。

授業を終えて授業者から

中学校年代にとって仏像彫刻は、普段観たり触れたりする機会が少ないものであり、とりわけ北海道の生徒たちにとっては縁遠い存在です。この授業では仏像作品を「より身近に感じてもらう」ことに重点を置き、「彫刻作品としてのよさや美しさ」としての見方や感じ方ができるような授業構成にしました。「観る」「想像する」「比べる」「シェアし合う」。生徒たちは懸命に頭と心を働かせ、授業に取り組んでくれたと思います。先生方からのアドバイスも私の財産になりました。授業の後半、教師主導での説明が多く、生徒のつぶやきや発想を生かし進められる授業内容になるとさらによいというご意見もたくさんいただきました。この授業が多くの皆様の心の発動のきっかけにできたことをうれしく思っています。

提言分科会のまとめ

こどものまなざし

円山『カプラを楽しむ子どもたち』（幼稚園）
北海道　聖徳学園なかのしま幼稚園　西岡由花子
・カプラとは、厚み：幅：長さ＝１：３：１５でつくられた木片。これを、並べたり積み上げたりしていろいろな形に変化する様子を楽しむ。
・遊びを進めていく中で、小さい作品から友達と協力して、より大きな作品へと遊びの可能性が広がっていく。
・幼時期では形にこだわるという知育的な活動ではなく、もっと触るという活動が大切である。
・すでに子どもたちはカプラの感触を十分に楽しんできている。そのような活動を経て形へと移行させてきた。

円山『ころ　ころ　こころ』（小１・２）
北海道　由仁町立三川小学校　佐藤　　祈
・以前に札幌で行われた研究授業を、自分の学校で行うとしたらどのような展開になるか再構築した授業である。
・再構築というよりも、むしろ授業の再現でなくてはならないのではないか。
・小規模校だから実践できないというのではなく、どこでも何人いても同じ目標で授業を再現できなければいけないと考える。
・前回の反省点をしっかり生かし工夫したことで、子どもの満足感や思いの強さをより引き出せたのではないか。

東西『守り神シーサー　うれシーサー』（小３）
沖縄県　糸満市立潮平小学校　宮里　雅代
・子どもたちにとって、楽しそうが一番大切。思いをもってつくるための鑑賞活動での気を付けていることや手立てを考えている。
・シーサーをつくりながらも実は自分自身をつくっていることにつながる。
・沖縄の伝統工芸でもあるシーサーが子どもたちとって、より身近な存在になったのではないか。
・子の活動を通じて子どもたちは心から創作活動を楽しんでいることがうかがえる。
・鑑賞→清作→言語活動へ戻るという一連の活動が素晴らしい。

東西『切ってギコギコくぎトントン』『広がれ！ふしぎ絵の貝ワールド』（小３）
愛知県　名古屋市立大宝小学校　河口　貴子
・イメージキャッチボールについては、図工の時間に限らず他の教科でも活用できる。
・思いっきり（たっぷり体験）→イメージキャッチボール（絵や言葉を通じての交流）→きらきらシール（活動の振り返りで価値づけ）という設定は有効である。
・子どもたちが自分の思いを素直に表現し、教師がその子らしさをそれぞれ受け止めることの大切さを改めて考えさせてくれる実践である。

円山『屏風絵づくり』（小４）
北海道　函館市立中の沢小学校　赤坂　巌男
・子ども同士の温かな触れ合いを大切にしたいという思いを共同製作の形で実践。
・一つの大きな作品ということで評価の難しさがあるが、制作過程や子ども同士の関わり合いの中から見取ることができる。
・学年末の制作ということで、一年間かけて表れてきた子どもたちの思いや成長したなと思える資質や能力を感じ取れる。
・子どもの作品に対する思いを少しでも変えていくための工夫を考えるのが図工の面白さではないか。

円山『光を並べる』（幼稚園）
大阪府　大阪成蹊短期大学　塩見　知利
・客観視できる垂直画面と身体性を伴った水平画面の両方の体験が成長には必要だと考える。
・蛍光塗料を塗った小石や紙粘土を並べてブラックライトを当てた時に光る美しさを子どもたちに実感させることができている。
・身体性とは触感を伴うものであるので、例えば自分で石を拾わせて塗料を塗らせ。（石を直につかむ触感）そして、自分なりに並ばせて光らせるという一連の流れだったら、別の子どもたちのよさも見つけられたのではないか。

東京『ものくろあーと』（小６）
北海道　教育大附属釧路小学校　若林　朗子
・総合的な学習とリンクさせて取り組んでいるところが素晴らしい。
・筆の使い方や墨の濃淡をうまく表現にいかせるよう技法から入っているのも良い。
・中学校でも水墨画を扱った題材はあるが、指導の明確化を図らなければいけない。
・中学校では、今回の題材のねらいにプラスして、水墨画の奥行き（技術）や日本古来の『わび・さび』文化のよさや美しさ（表現）を求めている。

円山『空間のモザイク』（小４）
東京都　板橋区立高島第五小学校　大畑　祐之
・新しい題材開発や『見上げてみる』という視点を取り入れたところが面白い。
・日々の『ひらめき』を大切にしている姿が感じられた良い実践である。
・図工専科の先生らしくしっかりと練られた子どもへの投げかけや必要な支援、子ども同士の言葉を介した交流、さらに自分の良さを実感させるような教師の見取りもある。
・特に時系列で子どもを追いかけ、一人一人に合わせた細やかな対応がこれからの私たちには課せられている。
・今後も図工の素晴らしさを伝えていかなければいけないとあらためて思った。

円山『〈おどろき〉のスケッチと風』（小５・６）
北海道　別海町立上風連小学校　外川　篤司
・驚きはまず、教師になければいけない。しかし、子どもに提示していく場合はその３倍、驚きの質について吟味していかなければならない。驚きの種はそこにある。そう考えると題材としてのバナナの価値はどうだったのかを検証していく必要がある。
・造形教育の原点は泥んこ遊びの中に凝縮されている。子どもたちは泥遊びが大好きで、その中で五感をしっかり働かせながら造形活動を行っている。
・造形活動は、何も大きなイベントを組むことではない。身の周りや身近にある自然、自分たちが生活する地域にはたくさんあるので、そこから再発見する驚きもあるのではないだろうか。

東京『日常を作り出す子どもたち』（小４）
愛媛県　松山市立高浜小学校　木村　早苗
・造形活動とは日常の何気ないことやものがどんどん自分の頭の中で変化していくということ。
・スケッチブックを介して先生と子どもたちとが対話している。日常からクロッキー帳をつけているからこそ子どもたちの豊かな想像力やデッサン力として身に付いているということがよくわかる。
・何気なく見上げているいつもの木が、『あの木の上には何があるのだろう？』という発想から『絵を描きたい』という気持ちへと昇華していく。日常の何気ないシーンをどう感受していくのか？日々の積み重ねの大切さがそこにある。

実践『絵巻物〈鳥獣人物戯画〉』（中２）
大阪府　大阪市立夕陽丘中学校　堺谷　朋美

・どうしても伝えたい思いが多くて、教師の語りが多くなりがちである。教師の投げかけを生徒がどのように受け止めるのか？ストーリーを考えるところからスタートすると時間がかかりすぎる。
・絵巻物というのは生活の中にないものである。それを日本の文化としてとらえていく。
・鑑賞はアニメーションのように見ることが可能である。そして実際に筆を握らせることによって表現を理解することもできる。
・どういう能力や資質を生徒に身に付けさせたいのかを明確にすることが大切ではないだろうか？

実践『マイ・モアイ』（中２・３）
東京都　中野区立南中野小学校　内田　善人

・生徒への美術に対する意識調査から、一人でも苦手意識の子を減らしたいと考えた。絵画よりも立体制作を好む傾向が見られた。
・やはり自分の思いを込めた作品に仕上がった時の嬉しさはどの子にもある。モアイ設定の理由は〈一生手元に置いておきたくなるような作品を！〉という動機付けとしてふさわしいと考えたからである。
・技術的な面でのサポートも重要である。特にノミの扱いをしっかり教えれば怪我はない。自分なりに納得のいく作品に仕上がった瞬間に自己肯定感というものが生まれる。

実践『自画像　評価活動』（中）
京都府　京都市立深草中学校　喜田　健嗣

・中学生ともなると自己肯定感よりも自己否定に走る生徒が増えてくる。問題行動もその表れの一つである。
・夢や希望を生み出す美術を目指す。自己肯定感は作品が完成したときに最も感じるもの。そのための技術的なサポートは必要である。
・自画像を描き進める手順や描きながらの生徒間の交流も大切である。評価も交流の中で大いに活用できるアイテムである。
・指導が心配な子に対しては、教師が手を掛け過ぎるのではなく、逆に友達に協力させるよう促すと自分の価値を見つけるきっかけとなる。

実践『手の中のおまもり』（中）
北海道　恵庭市立柏陽中学校　工藤　由香

・子どもの思いを大切にした実践である。なかなか自分の思いを表出できない生徒に対しては日常生活の中から意図的にその生徒に合わせた関わり方で対応している。否定的な感情から抜け出せない生徒もいるが根気強く取り組んでいる。
・思いという言葉を生徒に常に意識させることによって内面を引き出すのは効果的でよく練られた実践である。
・指導要領の目標事項には順番がある。生徒が主題を生み出すためにどのようなアプローチの仕方があるのか考えさせられたよい実践であった。

提言分科会のまとめ

みらいへのまなざし

第五 『人・もの・場所と関わる造形活動』（小３・４）

北海道　岩見沢市立岩見沢小学校　竹田　睦生

- 図工の時間で何をどう教えたらよいのかを悩む先生も多い。それは子どもたち一人一人の発想を引き出し、絵や立体という目に見える形で具現化させるという教科の特性に起因しているのではないだろうか。
- 北海道には専科制がなく、全ての教科を学級担任が教えている。図工も、試行錯誤しながら、情報を交換し合いながら授業を進めている。この姿勢が教師の思考力や想像力アップにつながっている。

第四 『叩いて　みてみて』（小６）

東京都　目黒区立碑小学校　内田佳代子・目黒区立向原小学校　上野千絵子

- あっ、いいこと考えた！と子どもが思うのは、①見たことない材料と出合った時、②楽しいアイディアが浮かんだ時、③材料や用具を工夫して使う時、④友だちの活動や作品から刺激を受けた時である。
- 子どもたちの力をどのように育むのかを教師はしっかり考えなければいけない。その拠所は題材開発であり活動の評価である。
- 東京では子どもたち一人一人の作品カルテをつくっている。作品保管のスペース的な問題も解決されるし、何よりも自分の足跡を確かめ振り返られるのがよい。

第三 『地域とかかわり・いきいきと造形活動に挑む！』（小３）

佐賀県　佐賀大学文化教育学部附属小学校　雷永　千晶

- アートの力で地域を元気にしたいという思いで、数々のプロジェクトに取り組んできた。地域の方たちとのコラボトーク活動、身近な地域の造形物のよさを感じるアートウォッチング活動、そして地域に存在する空間や場と自らの表現活動のよさを引き出すマッチング活動という三つの柱で構成された活動展開であった。
- ともすれば学校と地域との連携が希薄になりがちな都市部の先生から、自分でも是非実践してみたいという声も上がった。
- 今後は地域の商店街の空き店舗や空港などにも出向いて活動する予定もある。

第二 『美術教師の学力向上が鍵！』（高全）

秋田県　秋田県立仁賀保高等学校　黒木　　健

- 図工が苦手という子も少なくはない。その芽は小学校のうちからすでに始まっている子もいるのではないか。
- 中学校で美術の授業に抵抗感を感じている子も確実にいる。そんな生徒の心をときほぐす指導である。
- 題材の構築や生徒たちに身に付けさせたい資質をしっかりと考えること。目の前にいる生徒の実態と題材の価値をどのように結び付けていくかは、担任する教師が一番よくわかっている。
- 美術が生活にもたらす意義をしっかりと教え伝えていかなければならない。そのための言語化も軽視できないのではないだろうか。

鑑賞『空飛ぶムサビ in 北海道』（中３）

北海道　江別市立江別第二中学校　井上　哲義・北広島市立大曲小学校　岩崎　愛彦

・武蔵野美術大学の学生がわざわざ北海道に来て自ら制作した作品について生徒たちと交流する活動である。
・地元の教育大学の協力も得ながら、生徒に一生懸命語りかける美大の学生やその思いを汲み取ろうと一生懸命な生徒との交流の価値は双方にあると思う。
・また、地元大学の学生の協力も得られたことでその活動に広がりも生まれた。
・武蔵野美術大学の学生はファシリテーターとして素晴らしい働きをしてくれる。
・新しいものをよいとか悪いとか判断するのではなく提言していくことの意義は大きい。

鑑賞『つながる・こころになる』（中全）

大阪府　堺市立深井中央中学校　伊藤　慶孝

・小中連携に関しては、ハード面の整っている一部の地域を除いて教師の負担感が多いのは事実である。
・子どもたちの心の中に全ての源である〈郷土愛〉や〈地域に対する愛着〉の芽が少しずつ育っていけるような活動でありたい。
・小中連携では小中の教師間の共通理解も大切である。今回の連携を足がかりとし、図工教師でなくても連携できるような方法としてICTの活用も積極的に導入しているところが素晴らしい。子どもたちの世界が広がった時、そこにある文化や芸術の価値を伝えることが大切である。

鑑賞『学校・美術館・大学の連携を通して』（全）

北海道　旭川市立光陽中学校　吉野　法行

・学校と美術館、大学との連携において大切なことはそれぞれお互いの価値について十分に話し合うことである。それぞれの立場や方向性を共通理解するところから活動が始まる。そして継続した連携を築くための組織作りもポイントとなる。
・学校内でも美術教育活動に対して温度差は確かに存在する。少しずつでも理解者を増やすためのアピールは欠かせない。
・忙しさや予算面などでクリアしなければならない問題もある。実際に取り組んでみての生徒たちの声を届けるのも効果的である。

鑑賞『本物と出会う』（中２・３）

北海道　釧路町立遠矢中学校　更科　結希

・地域の文化施設を大いに利用して、子どもたちには本物を見せていってほしい。そのきっかけを学校の活動の中でつくっていくことはこれからの子どもたちの人生を豊かにしていくことにつながる。
・教室での授業の枠を超えた素晴らしい実践である。本物を鑑賞する価値は大きい。交通手段や授業時数などクリアしなければならない問題もあるが学芸員さんも作品貸し出しに積極的であり、本物なら観てみたいという声も多かった。地域芸術関係機関へのアプローチを学校として依頼できれば新しい展開が拓ける可能性も大きいのではないか。

鑑賞『それぞれの自画像』（中３）

沖縄県　那覇市立東風平小学校　二宮　陸生

・描くことへの抵抗感を取り除く〈主題をとらえきれない子〉へのアプローチの方法として、作者の手法や構図を真似ることから始めた。この真似るということについては疑問もあるが、彼らには入口が必要であった。
・まだしっかりと自分の内面を見つめられていない。真似をすることから安心感や楽しみ、驚きを感じ、そこから自分なりの線や形を見つけ出していくことにつながっていくと考えた。
・頭ではなく手を動かしていくうちに主題に迫っていけたのだと思う。

第2部『動くよ　動く　絵が動く』（小５）
熊本県　熊本市立健軍小学校　星子　聖一

・今日のネットワーク社会における学校現場でも情報機器をツールとした新たな表現活動も考えられる。
・作品の中に子どもたち全員のアイディアを取り入れることもでき、表現活動への意欲化も図ることができた。
・話し合いでは、グループの構成の仕方や絵の具を使わせずに、あえて色紙で取り組んだことがどのように子どもたちの意欲と結びついたのかを検証しなければいけない。
・これからパソコンをツールとして子どもたちに利用させることが多くなると思うが教師側の技量アップも必要である。

第3部『制作作品の合評から考える』（高全）
大阪府　大阪府立三島高等学校　八木　遼蒼

・子どもは現実と非現実を混在させて生きている。〈人が生まれてから死ぬまでの間に美術とどのように関わっていくのか〉を考えると小・中・高校の授業も変わる。小学校高学年から理想（アート）と現実（社会）が見え始め、中学でその区分けができ、高校では再度それらを結び付ける。
・美術教育＝その子の生き方にどうプラスになっていくのかを考えなくてはいけない。
・未来の扉を開くのは教師ではなく子ども自身である。それを美術という道具でどのようにアプローチしていけるのかを考えればよい。

第4部『題材に必然性を』（小５・６）
広島県　広島市立川内小学校　川島　仁氏

・子どもにとって必然性の感じられる題材とは何か？相手意識を持たせながら制作活動に向かわせるとき、子どもたちの意欲が高まっていくことがある。
・またアイディアスケッチと評価カードを組み合わせることによって自分の通ってきた足跡を振り返り、次の制作への意欲化につながっていくと考える。
・図工という教科を通じた一年間の学級経営のあり方や自己評価の方法（４段階と３段階の違い）についても、考えていかなければいけない。
・これからの図画工作教育が学校現場で担う部分の多さがうかがえる。

提言分科会のまとめ

教師のまなざし

幼園『やりたいがいっぱい』（幼稚園）
北海道　札幌英伸幼稚学校　若杉　由恵

- 子どもたちの遊び場が園の周りにたくさんある。冬に防風林で思いっきり遊ばせ、その後に絵を描かせると、子どもたちはとても自由な発想でイメージを広げる。
- 幼稚園は子どもが経験する初めての集団生活の場である。楽しいと思える場でなければいけない。
- 保護者も幼稚園を楽しむことが、子どもの自由な発想が自分で考えて活動する原動力となる。
- 表現とは、表すと現れるがくっついた言葉である。表しか見ないのが現在の教育で、子どもの内面的な“現”を教師が心で受け止めなくてはいけない。

円山『森でみつけた　マイルーム』（小３）
山梨県　北杜市立高根清里小学校　臼井　恭子

- ワークシートを振り返りカードとして授業の最後に活用している。その際、出来上がった作品の写真を見ながらまとめさせることによって、評価の４観点を意識させることができたと考える。
- 子どもの思いを具現化させるために、教師一人ではなく三人のゲストティーチャーの力を借りたことは子どもの求めに応じた手助けとなった。この点は評価できる。
- 子どもの自由な発想＝自由にやらせることではなく、教師の思いと子どもの思いの架け橋となっているのが４観点の共有ということになる。

円山『〈鳥獣花木図屏風〉の世界』（中１）
滋賀県　大津市立瀬田中学校　伊庭　照実

- 一時間という限られた時間でたくさんの動物が描かれている鳥獣花木図屏風を生徒に鑑賞させるためのワークシートや電子黒板の利用は効果的だと思う。その一時間で生徒はいろいろな見方や感じ方をする。
- 最終的なまとめは特にないが、学習のねらいにもよるが、絵を描くということは頭に描いたものを形に表すこと。それができるのは人間だけ。美術の良さに気付いてほしいとは思うが言葉に出していない。
- 評価についてはワークシートで行う。これはテストと同じ扱いである。

幼園『カラーパフォーマンス』（幼稚園）
北海道　大地太陽幼稚園　星　　恵

- 自然の中での活動を通じて、色というものを意識させているところがいい。
- 日常の生活の中にカラーパフォーマンスの素地がたくさん眠っている。畑や園庭の木々、水辺に色水を並べるなど、その活動全てがつながっていく。
- 幼稚園の場合は保護者の協力も不可欠である。作品の背景には幼児の暮らしがあり、それを支えている人もたくさんいる。
- あたたかい関係が作品の中に表れている。アートの力の素晴らしさを大人も子どもも共有できる取組である。

展示『〈子どもの思いあふれる表現〉をもとめて』（幼稚園）
大阪府　大阪市立今川小学校　狩谷　潤也

・保育園との連携で、一度制作したものを再度作っているが２度目の子どもたちの意識に変化はあったのか？について、１回目よりも飾りつけは少なめで、より頑丈に作っていた。
・さらに保育園児に大人気のアンパンマンなどのキャラクターを入れるという工夫も見られた。相手意識をより強く持って制作していた。
・また、動物園のパックが全て〇だったが、筆やローラーなどは水加減が難しいと判断しタンポのみであった。低学年の場合、絵の具は表現の幅を狭めてしまうこともあるので注意が必要である。

展示『評価のあり方についての考察』（中全）
青森県　板柳町立板柳中学校　高安　弘大

・一年間の集大成としての作品集を作ることを事前に知らせた。また交流を学年に応じて段階的にステップアップさせたり、生徒の作品を写真で残したり（評価の一助）してきた。
・ともすれば作品集作りの一年間に陥りがちだが、一つ一つの実践を丁寧に取り組んでいることが伺える。
・授業の中に評価の四観点を盛り込むことにより生徒も教師もお互いの思いを共有し、目指す方向性や身に付けさせたい資質能力を常に意識した制作が年間を通じてできる。

円山『学校ＣＭをつくろう』（中３）
北海道　教育大附属釧路中学校　花輪　大輔

・生徒の中に『自分はこうしたい！』という思いがあり、これまでに積み重ねてきたものを３時間でたくさん詰め込んでいる。ＣＭイメージボードからそれらが読み取れる。
・美術というのは総合的な知性にかかわる授業だと感じた。
・評価の問題については非常に難しい。目の前にあることだけで評価を決めてしまうのは危険な場合もありうる。
・評価の第２観点における《拡散》→《焦点化》を図るための言語活動で生徒同士がお互いの作品にどれだけ寄り添っていけたのかがポイントかと思う。

展示『図工から学級経営を考える』（小５・６）
北海道　更別村立上更別小学校　土橋　直美

・パック絵の人物の表現や体の動きなどが素晴らしいと思った。
・子どもたちが作品カードに技術面ばかりではなく、どんな思いで描いたのかを書き込むようになってから、絵が変わっていったと思う。
・形には意味があって、形と思いがあって初めて絵になっていく。
・最後までおっくうがらずに仕上げるという姿勢を中学校にも引き継がせなければと感じた。
・この取組はキャリア教育そのものである。横断的かつ教育的に子どもたちの資質を育てている。

円山『指導と評価の両面から』（小全）
奈良県　奈良女子大附属小学校　大野木位行

・《自分を新たにする》とは、できなかったことができるようになるとか、思いつかなかったことが思いつくようになるなど、自分が少しずつ更新されていくことを指す。今大会の《わたしをつくる》と通じる部分がある。
・境をうまく生かした題材でありネーミングも“マイ～”と子どもたちの意欲をかきたてるものとなっている。関西地方では〇〇方式などのマニュアル化が進み、没個性化が進んでいる中、子どものよさを言語表現など含めて自由に引き出すことができる活動構成となっている点がすばらしい。

鑑賞『卒業制作：〈ワイエス〉か〈魁夷〉』（中３）
奈良県　奈良市立二名中学校　江村　圭造

・美術の力が常に学校生活において影響力を及ぼしているということが大切である。対話による卒業制作への取組では、単に作品の良し悪しに陥らないような手立てを打つ。
・話し合いが建設的なものになっている。より良いものにしていこうとする活動となっている。
・限られた制限（制作金額や大きさ、時間など）の中で一人一人の満足感を得ることはなかなか難しいが、子どもたちの育ってきた資質や能力をしっかりとらえた上で、バランスのよい取組を考えていかなければいけない。

鑑賞『題材の在り方を考える』（高全）
北海道　札幌大谷大学短期学部　平向　功一

・鳥獣人物戯画との出会わせ方や自由な発想で台詞と場面設定を考えさせる～深める→上げ写しや骨描による線の美しさを実感し、絵の中の動物をゾートロープの手法を使って実際に動かしてみる～繋げる→自由な発想で動物に動きを入れてパソコンでアニメーション化～広げるという流れで構成した。
・この題材をいつ、どの学年でどう配置することが最も効果的なのか？題材については生徒に選ばせることができれば意欲化にもつながのではないだろうか。

鑑賞『ぬのから生まれた形』（小６）
北海道　千歳市立桜木小学校　庄子　広美

・つなげるという行為は新しいものを生み出す。どうやって自分の作りたいものを作らせるのか？布の伸縮性やもとからついている柄や色などからどのように展開し可能性を広げていけるかが大切である。
・図工は、今もっているものやスキルを高めていける楽しい教科である。そのために教師の題材設定や評価もしっかりやらなければいけない。
・教師の投げかけによって子どもがどう反応したのかをしっかり見取ることが教師のあたたかいまなざしと言えるのではないか。

鑑賞『評価から考える』（中高）
東京都　千代田区立九段中等教育学校　落合　良美・小野征一郎

・現在の小・中学校の図工美術の評価は４観点別になっている。それはある意味では伝えにくかった美術科の評価をわかりやすく示す手立てとなっている。
・中三で家庭科と美術のコラボでエコバックを制作した時に評価（関心Ａ発想Ｃ技能Ａ鑑賞Ａで総合評価４）をもらった生徒がいる。彼の思い（本当に４でいいの？）と、Ｃ項目があるのに評価４をつけた先生。評定を通じて先生は何を伝えたかったのかを精査し生徒と共有する。これが指導と評価の一体化への一助となるのではないだろうか。

鑑賞『さくら・さくら・ちょうちょ』（小２）
東京都　新宿区立愛日小学校　平田　耕介

・ねらいが途中で変わってしまっても子どもの思いを大切にするほうが重要である。
・教師が子どもたちにつけさせたい力は何かをしっかりと見定めてカリキュラムを作ることが望ましい。
・子ども同士がお互いに高めあえるようになるためのステップを長期的スパンで構築していくことと、各学年の発達段階にあわせた教師のあたたかなまなざしが大切である。
・活動の限定は子どもたちの思いを止めてしまう。逆に自由奔放にやらせるのでは教育活動として成立しない。教師は授業のコーディネーターである。

大会関連刊行物

第１次案内

最終大会案内

子どもアート展2011ポスター

実践事例集

研究紀要

指導案・提言集

記念集録

◇扉◇ こどものまなざし

◇あったかい授業、よい話し合いができました。教科としての発信が必要。全体の中で発信できなかったのは残念でした。
◇この企画は「あったかくておもしろかった」です。ただし気がかりなのは、図工・美術についての課題が30年前とあまり変わらないことです。社会と常につながっている教科でありたい。
◇小学校だけでなく、幼稚園においても子どもたちが心から楽しんで活動することが大切だと改めて実感した。

◇子どもの姿、先生方の熱意は、まさにあったかさの感じられる各分科会でした。京都から来てよかったです。子どものよさが引きだされ、育てられていることに学ぶことが多くありました。掲示作品、立ち止まって見ました。

◇他領域、異校種の先生方と"あったかい"時間を過ごすことができました。この場で学んだことをアートの力として、子どもたちに伝えたいと思います。「何ちゃってカフェ」楽しかったです。迷ったのですが、来てよかった!!

◇今大会、どこに参加しても大変勉強になることばかりでとっても嬉しいです。各地域から集まった先生方との交流が一番のパワーになった気がします。

◇グループには広島県や愛媛県の方がいて、色々なお話が聞けて楽しかったです。一日参観したり、話を聞いたりしていたので、この時間はリラックスしておしゃべりできて、とてもよかったです。

分科会の新しい形を提案

幌西小会場ファシリテーター
水　野　一　英（宮の森中学校）

今回は、一般的なワールドカフェの形態ではなく、デモ版とも言える簡潔にした形で行いました。幌西会場は180名ほどの参加者で、道内はもちろん遠くは沖縄からの参会者もあり、まさにワールドな雰囲気漂う会となりました。

ファシリテーターも初めての体験で、戸惑いながらの進行となりました。しかし、そこは教師集団、「私が見つけたあったかい授業（あったかい授業をつくるために）」というトピック（柱）のもと、机上の画用紙に必要以上の記述（メモ）をしながら、まさしく"あったかい"話し合いを繰り広げていました。北海道ならではのお菓子をつまみながら、話し合いは次第に盛り上がり、あちらこちらから笑いや歓声が響いていました。こちらの指示も届かなくなるほどの盛り上がりで、大きめの声で指示を出すと「ファシリテーターはマイクで話し過ぎ」と一部の方からクレームが出るほどでした。

カフェの最後には、最も遠方から来た方々に、グループでの話し合いの様子を、メモを披露しながら語って頂きました。様々な地域、校種、異なる扉の参会者が集ったためか、多様な視点での話し合いになったようで、どの方も満足そうな表情を浮かべていたのが印象的でした。

急遽決まったこのワールドカフェ方式の話し合い。準備不足はいなめませんでしたが、分科会の新しい形を全国の先生方に提案し、共有できたことは、大変意義があったと考えます。

◆扉◆ 教師のまなざし

◆他県の先生方との話し合いの中で、いろいろな視点があることを感じました。また、子どもたちに必要な力については、どこの県でもやはり共通の認識を持っていることを確認できました。

◆子どもたちが抱えている問題点や先生たちの思いを共有することができ、非常によかったです。学校だけでは解決できない課題もあり、親や社会に向けても造形教育がどんな働きかけができるだろうか考えさせられました。

○扉○ みらいへのまなざし

○いろいろな環境で子どもたちと向き合っている方々のお話を聞くことができ、とても勉強になりました。幼・小・中と年齢は違えど、悩みやこうなってほしい！という未来への思いは共通する部分があったので、話し合いができてよかったです。

○扉分科会、とてもよかったです。このような形式で話が十分にできたら、もっとよかったと思います。色々な地域の方々とのふれあいはできないので、交流ができる機会は貴重です。参加してよかったです。時間が短かった!!

○地域が違うと取り組みの内容や感じ方、困り感などが違うのではと思っていましたが、どの地域でも抱えている問題や目標には差異がなく、改めて全国レベルで頑張ろうという気持ちになりました。

○全国大会の分科会は、やはり多種多様な地域や職種の方が集まり、自分の固定概念だけで考えていては広がらないなと感じさせていただきました。

○同じようなことを考えている方が日本中のあちこちにいることがわかり、安心できました。また、皆さん、様々な環境で様々な実践をされているので、自分も頑張らなければと改めて勇気づけられました。

◆様々な地域の立場の方々のお話を聞くことができました。どの立場でも、子どもたちが表現し受け入れられ、それを伝える力を"あったかい"環境の中で育てていけたらと話ができました。

◇「あったかい」は他者とのつながり、制作は個人的な活動ですが、その先には必ず作品を見る人の顔があると思います。そのつながりが授業の中で見えると、「あったかい」。

◇小・中・幼の先生の話を聞くことができ、幼児期に「きれい」「かわいい」「楽しい」と感じる経験がいかに大切か、改めて確認することができました。小・中への将来につながる根っこの部分を育てられる保育をしていけるよう努めていきたい。

◇扉◇ こどものまなざし

◇小さいうちからいっぱいいろいろなものに触れていくこと、手をどんどん動かすことが、やはり大切だと感じました。発達、特性に応じた感動体験をたくさんさせてあげたいと思います。が、もっともっと勉強しないと…。

◇子どもたちは本来描くこと、物を創ることが大好きなのだと思う。色々な経験・体験を大切にさせること、仲間との交流を通しお互いを受容させていくこと、そして教師は、常にわかりやすく熱意をもって授業をつくっていくことが大事だ。

◆新たな取組と思える扉分科会での、全国からの先生との意見交流は大変意義深かった。おもしろいワールドカフェ風の話し合いは短時間だったが、全国の先生と近くなったような気がした。

◆「あったかい授業」というテーマを通して様々なキーワードが飛び交い、刺激的でした。「自己肯定感」「題材」「感性」「信頼関係」このあたりのことを振り返り、深めて、今後に生かしていきたいと思います。

◆扉◆ 教師のまなざし

◆あったかい授業には、子どもの認め合い共感し合う姿があり、のびのびと感性を働かせている姿がある。それを生み出すためには、教師側の子どもを見る温かい眼差しと子どもの創造性を信じるあったかさがある。

○各地の図工・美術の先生と話し合えて、とてもよい機会になった。話し合いの結果「笑顔、認め合う、仲間」がキーワードとして出てきた。これからの図工の授業を通じて、友だち同士で認め合うことを土台として作っていきたい。

○感動を与えられる美術館。地域のハブ的存在として文化教育のセンター的役割を果たせるように頑張ります。

和気あいあいと親しく交流

円山小会場ファシリテーター
川　島　正　夫（手稲北小学校）

計画段階では、多くの人が初対面でいきなり深い話ができるものかと心配でしたが、実に和気あいあいと、しかも当日のテーマである“私が見つけたあったかい授業（あったかい授業をつくるために）”をふくらませ、よい話し合いができたと考えています。ワールドカフェ方式を経験されている方もいたとは思いますが、うれしいことに事前の私の不安は杞憂に終わりました。

お一人お一人がテーマについて書いたことを交流するところからスタートしたのですが、「本日の各テーブルの進行役を一番長く書かれた方にお願いします！」という私のムチャぶりにもかかわらず、全てのテーブルでスムーズに進行している様子を見て、感謝と感動を覚えました。

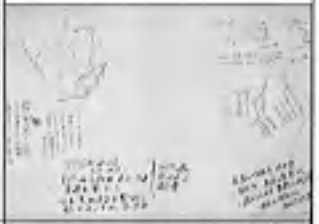
準備十分とは言えない中でのスタートでしたが、多くの参加者から「６人で交流しました。もっと時間がほしいと思った。」「幼・小・中・高と校種が違うメンバーが集まり、有意義だった。もっと話が聞きたかった。」という声をいただき、今はほっとしています。「あったかい授業をつくるために、事前の雰囲気づくりや場づくりが大切」、「教師の普段の言葉遣いや授業づくりこそ大切」、「“あったかい”は教師と子どもが一緒につくりあげるもの」等、これからの授業づくりの土台となる話し合いができたこと、そして何よりも、全国の造形教育関係者が少人数で、親しく意見交流したことは素晴らしいことだったと実感しています。

○扉○ みらいへのまなざし

○授業の題材、進め方だけでなく、子ども一人ひとりの人生に美術をどう関わらせていくか…ということを考えた一日でした。（３年通した題材、小中連携など）毎日のことで手いっぱいにならずに、広い視界を持って考えていきたいです。

○あったかい子どもとは、一人一人が自信をもって集団をつくっている状態ではないか。自信をもつということは、自立して共存するということにもなるのだと思います。自信があれば他者にもやさしくできる…。

○今、岡山が取り組んでいる内容にマッチしていて、とても参考になるとともに、力になりました。今年の県大会では、同様のテーマで発表する予定です。ありがとうございました。



参加者の皆さんから、たくさんの感想カードをいただきました。一部しか紹介できませんが、「あったかい中」ありがとうございました。

7月28日　3日目　授業プレゼン

司会の平井歩先生（札幌市立啓明中学校）が、授業解説プレゼンテーションの開始を宣言。まず、「こどものまなざし」の扉について、扉責任者の札幌市立宮の森中学校の水野一英先生を指名。

司会の平井先生

授業づくりで重視した点を説明する水野先生と授業者の先生方。

「こどものまなざし」の扉

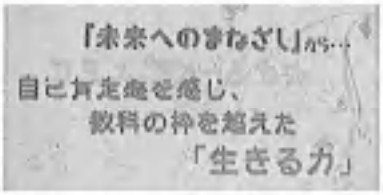
◇「子どもの感性を引き出せる教材化・題材構成を子どもの視点から問い直す」という主題のもと授業づくりをしてきた。

◇「感動体験のある魅力的な題材であるか」「子どもたちのアイデアや工夫、試行を可能とする形や色彩、材料に着目しているか」を大切にし、これらのことを投げかけ、子ども同士、子どもと教師で共有できる授業を目指したことを説明。

◇以下、円山、幌西両会場の７つの授業について、順に子どもの活動の様子を写真で紹介し、主題や大切にしたかった点がどのように表れたかを具体的に取り上げた。

「みらいへのまなざし」の扉

◇扉責任者の札幌市立藤野南小学校の藪下栄一先生が説明。



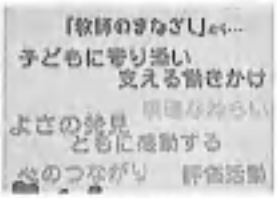
◇「社会とのつながりや授業の広がりの可能性を通じて生きる力を育む造形教育を問い直す」という主題のもと授業づくりをした。

◇「感受性やコミュニケーション能力、自己肯定感や共感性が発揮される題材であるか」「学校・教科・授業の枠組みにとらわれない広がりのある題材構成であるか」を大切にし、ねらいに迫っていく授業、また、他者との関わりで新たな価値観を発見していく授業を目指した。

◇以下、同様に、６つの授業について、主題や大切にした点が授業にどのように表れたかを具体的に取り上げた。

「教師のまなざし」の扉

◇扉責任者の北海道教育大学附属札幌小学校の堀口基一先生が授業づくりで重視した点を説明。



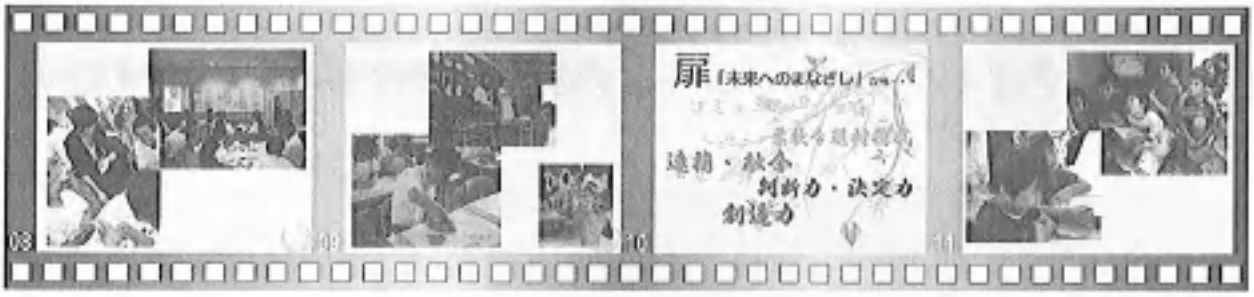
◇「子どもたちの資質や能力をとらえ、育む力を明確にした教師のかかわりを問い直す」という主題のもと授業づくりをした。

◇「育みたい資質や能力を明確にし、それを発揮するための働きかけや受け止める手だてが見える授業であるか」と「子どもの学ぶ様子からよさを発見し、心の動きや変容を大切に見つめる評価活動がある授業であるか」ということを大切にした授業を目指した。

◇同様に、６つの授業について、主題や大切にした点がどのように表れたかを具体的に取り上げた。

司会の平井先生が授業解説プレゼンテーションを終了することを宣言し、改めて出席者全員で、壇上の授業された先生方に盛大な拍手を送った。

テーション　会場　市民ホール



7月28日　3日目　全員シン

北海道造形教育連盟研究部長の湯浅大吾先生と札幌市造形教育連盟研究部長の森貴祐里先生が司会をし、会場全員にアンサーカードとなるピンクと白に塗り分けられたうちわを使いながら、会場全員でつくりあげる全員フォーラムとなりました。また、うちわの色が会場全体をどのように染まっているのかが一目でわかるように会場の様子をステージ上のスクリーンに映し出しました。（YESがピンク、NOが白）司会者の５つの質問に対しフロアーにいる参加者がアンサーカードで回答していただいたり、その内容について声をいただいたりしながら、進めていきました。ステージと会場が一体となった“あったかい！”全員フォーラムになりました。

質問１	20本の授業プレゼンテーションを見て、自分の見た授業よりも見たい授業がありましたか？
アンサーメーター	YES　ピンクと白は約半数ずつ　NO

〈フロアーの皆様から〉

・円山会場にいたのですが、幌西会場にも行ってみたかったです。授業のスタートが15分ずつ階段式になっていたので、たくさんの授業の導入を見ることができました。

・幌西会場にいましたが、円山会場で行われた「旅するムサビ」の授業に興味がありました。岩見沢にいますので、是非、教育大学の学生さんと一緒に授業を実践してみたいと思っています。

質問２	３つの扉から授業を考え実践しましたが各扉の主張が伝わりましたか？
アンサーメーター	YES　９割近くがピンクに　NO

〈フロアーの皆様から〉

・幌西会場で本郷新の彫刻を教室で鑑賞する授業を見ました。学芸員さんとの連携がよく伝わってきました。学芸員さんが子どもたちの言葉を理解しようと努め、一緒に授業をつくっていました。また子どものカードが美術館に展示されることにも共感しました。

ポジウム　会場　市民ホール

質問3

2つの視点から授業をつくり、教室が“あったかい”空間になるような授業を目指してきましたが、いかがだったでしょうか？

アンサーメーター　YES　会場はほぼピンクに　NO

〈フロアーの皆様から〉

・子ども同士のあったかいつながりが感じました。そして、普段の授業の様子が伝わってきました。題材もよく吟味されていました。制限が多いようにも思えましたが、材料を精選したからこそ子どもたちの発想がより広がったと思います。あたたかなつながりがそこにはあったと思います。

質問4

自分が参加した提言はよかった？

アンサーメーター　YES　会場はほぼピンクに　NO

〈フロアーの皆様から〉

・提言を聞いていて、とても素敵な発表だったと思いました。そして、この発表を全国に発信していってほしいと思います。提言者や授業者の中では、「これからも情報を交流したいですね。」と話が出ているようです。ここから、つながっていってほしいと思います。

質問5

北海道の全国大会に来てよかったなあ。

アンサーメーター　YES　会場ピンク一色に染まりました

〈司会者から（森實先生）〉

会場をピンクに染めてみたかったんです。会場のみなさんが“あったかい”気持ちでつながったように感じます。今回の大会であったかい造形活動を目指したことで、私達の心と絆がより、あたたかくつなぎ合えたように思います。本当にありがとうございました。

7月28日　3日目　全　体

国立教育政策研究所教育課程研究センター　教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局　教科調査官

岡田　京子 先生

"むかしむかし" 自分の新採のとき研究授業で「ここを切ってください」と、子どもに指示したとき、一人の子どもが「どうして、ここを切るんですか？」と言いました。その時、「なぜ、そんな質問をするのかな？」と思ったのと同時に、「どうして私は切ることを指示したのだろう？」「指導って何？」と考えたことを思い出しました。そのことは、ずっと考え続けてきました。

昨日の授業を見ながら、８つのキーワードで「子ども」の姿を捉え直してみます。子どもがわかります。

○子どもは言いたい　○子どもは工夫する　○子どもは思いつく
○子どもは考える　○子どもは楽しむ　○子どもは感じる
○子どもは共に学ぶ　○子どもはしたいことがある

子どもの姿のそばには、それを支える先生がいます。そして、子どもは、先生のことを、あったかいまなざしで見つめています。これから、共にがんばっていきましょう。

国立教育政策研究所教育課程研究センター　教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局　教科調査官

東良　雅人 先生

この大会は、今まで私たちが大切にしてきたことを再確認できた場と思います。そして、３つのあたたかさが、心の中に生まれました。

一つ目は、子どもたちの学びをスタートラインとした授業づくりの大切さの"あったかさ"です。図画工作、美術は活動を手段として、その過程で子どもたちに必要な資質や能力を育成する教科です。しかし、手段である活動や作品をつくることが目的になってしまうと、育む力が抜け落ちてしまうことがあります。今回は扉を中心とした研究の柱がしっかりしていたことで、授業をつくる側、見る側のそれぞれが同じ立場で授業をつくっていくことができたのだと思います。

二つ目の"あったかい"は、つながるということです。子どもたちが形や色を通して、子ども同士がつながることだけでなく、ものとつながったり、物事とつながったりしていくことがこの教科の特質だと思います。そして、ワールドカフェを通して先生たちのつながりも強くなったのではないかと感じました。

最後に、これから先、私たちがどうあるべきなのかを示してくれたことの"あったかさ"です。今までの戸惑いや疑問を一人一人が確かめることができた大会でした。

講　　評　　会場　市民ホール

聖徳大学児童学部児童学科教授

奥村　高明　先生

自然や景観の美しさと先生たちの熱い思いを味わえた３日間であった。平成の改訂を大きく振り返ってみると、①元年では造形遊びについて、②平成10年では４観点と学習評価について、③そして20年では内容の整頓と《共通事項》がポイントだった。まとめれば『子どもにどんな作品をつくらせるのか？』から『子どもにどのような力を付けさせるのか？』への変容である。そして今後は、その具体像としての『題材』が求められることになる。その際、①どこまで条件を提示するのか？②どういった時系列で活動が進むのか？③どのような手立てを打てば子どもたちが自分の思いを大事にしながら活動するのか？などを考慮する必要がある。子どもと先生の大切な設計図が『題材開発』であり『題材構成』だ。この大会はそれを中心的な課題にして取り組んだという点で時宜を得たものであった。また、資料や授業を通して①わたしの『心の発動』と『感動の共有』が繰り返されている、②わたしの『あたたかい』が『つながり』あっている、③わたしを『創る』ための様々な『他者』が存在しているということが明確に伝わってきた。確かに、子どもたちは他とのかかわりの中で学習を成立させている。幼小中高、そして大学というつながり合う生態系的な空間の中で成長している。

環太平洋大学次世代教育学部教授

村上　尚徳　先生

「子どものまなざしの扉」では、子どものやってみたいや行為そのものを価値ある活動と考え、活動する中での子どもの思考や判断等を大切にしている。つまりわくわくどきどきを大切にした授業作りに重点を置いている。「未来のまなざしの扉」では将来に渡っての資質や能力を重視し、コミュニケーション能力の育成や人と人、人と社会とのつながりをキーワードとしている。「教師のまなざしの扉」では、子どもたちの楽しさを保障しながらも、その活動を通じてどのような力をつけさせたいのか教師のねらいを明確にした授業作りを重視している。これら３つの扉を関連させてみると、まず子どもにどのような力を付けさせたいのかを明確にし、そしてそれが子どものやってみたいことと一致するような題材を工夫し、学習プロセスで友達や先生と関わり合いながら学習を深めていくことになる。学校の集団造形活動では、友達と同じものを見つめ同じ思いや感動を共有し合いながら新しい自分を創るというよさがある。ある子どもにとって、始めは興味のない対象であったとしても友達や先生、他の人との関わり合いの中で、徐々に楽しさが沸き起こり、自分一人では気付かなかった新しい世界を知ることになることがある。大学生と小学生の鑑賞の交流授業にもそれが見られた。自分の作品を持ち込んだ大学生との交流を通して、作品に込められた思いや意図を解き明かす過程の楽しみが、小学生にも実感できたのではないだろうか。

全国代議員会

2011.7.26
15:00～16:30
ホテル
ライフォート札幌

司会・進行　時任　　勝（全国造形教育連盟事務局長）
記　　録　加藤　幸子（全国造形教育連盟事務局）
出 席 者　50名

○開会の言葉　北海道造形教育連盟会長　菅　原　清　貴（札幌市立幌西小学校長）
○あ い さ つ　全国造形教育連盟委員長　永　関　和　雄（町田市立町田第三中学校長）
○議 長 選 出　益村　豊　大会実行副委員長（札幌市立大谷地小学校長）を選出
○議　　事

1）報告・承認
①2010年度事業報告・会計報告・監査報告（別紙）
・時任事務局長が資料（Ｐ８）活動報告、（Ｐ９）収支決算報告を説明
＊代議員名簿は、各地区からの名簿回収が遅れたため、現在印刷中であり、大会後すぐに発送する。
・会計監査は、23年３月大野雅生・水島尚喜監査による監査済みを報告　…承認
②2011年本部役員・校種別役員（Ｐ５、６参照）　…承認

永関委員長のあいさつ

2）活動方針案
・時任事務局長が６月24日の本部役員会で話し合われた方針案を説明・提案
①2011年度活動方針案・活動計画…（資料Ｐ７、８）　…承認
②2011年予算計画・・・資料（Ｐ10）　…承認

3）大会開催の見通しについて・・資料（Ｐ11参照）
・日本教育美術連盟とは、何年かに一度共催しようと考えている。
・資料Ｐ11の表は、大阪で提案したが未決定のもの。
・東北は引き受けるために、ローテーションをずらしている。

議長の益村実行副会長

4）次期大会開催県から（沖縄）金城　安正　大会長から挨拶
・８/１、２、３で進めている。一次案内を明日配る。浦添市で開催、ぜひいらしてください。

金城沖縄大会　大会長

5）各校種、各地区情報交換

水島尚喜
大学部会部長

・中学校部会…全中美理事　正留　久巴（東京日野市三沢中長）
・大阪に事務局が移る。松山先生が事務局長。
・HPを立ち上げ、活用していく。
・完全実施のためにレクチャーを受ける。
・時間が短いので情報交換する時間がほしい。
・大 学 部 会…教大協代表　藤江　　充（愛知教育大学）
・全美協…国立美術教育について考えている。

槇　英子
幼・保部会長

・幼・保部会…全造連幼・保部部長　槇　　英子（淑徳大学）
・手探りの中今までの流れを、パワーポイントで。
・実技研実施し、57人が参加。
・小学校部会…全小図連事務局長　濱方　克彦（東京北区西ヶ原中）
・全国の事務局のメールアドレス,HPなどの情報を集めて報告する。
・50名が参加、東京と北海道が実践事例発表。

正留久巴全中美理事

6）その他事務連絡等
・九州沖縄ブロック、数年後に出来上がるように話し合い中。

山中隆全美協会長と藤江充教大協代表

○閉会の言葉　大会実行委員長　塚　野　昭　臣（札幌市立向陵中学校長）

全国小学校図画工作教育連盟理事・評議員会

2011.7.26
13:30～15:00
ホテル
ライフォート札幌

司　会　濱方　克彦（全小図連事務局長）

記　録　麻　佐知子（都図研広報局長）

出席者　50名

○開会の言葉　今年度開催地理事　菅　原　清　貴（北海道造形教育連盟会長）

○あ い さ つ　全小図連理事長　高　橋　香　苗（江戸川区立南小岩小学校長）

○議　　事

1）平成22年度事業・会計報告
　全小図連事務局長　濱　方　克　彦　…承認。

2）平成23年度役員選出（別紙）
　…拍手にて承認。

3）平成23年度事業・予算案
　全小図連事務局長　濱　方　克　彦
　・全国事務局のメールアドレスやホームページの情報を集め、報告したい　…承認

○研　究　会【実践事例発表】

〈発表1〉「図工ができること」　本　間　基　史（東京都新宿区立落合第六小学校）

6月に岩手で造形のボランティアを行い、図工で子どもたちのために何ができるか考えさせられた。社会とのつながりを通して「図工の可能性」を考えていくことも大事ではないか。

・ハンズオンギャラリーとの連携（5年生）…触って鑑賞できるギャラリーの出前授業。
・建築家との連携授業（6年生）…垂木と輪ゴムでつくる建物。60分で街並みをつくる。
・美術館との連携（4年生）東郷青児美術館との連携　子ども学芸員がお客様を招いてギャラリートークを行う。・親子造形あそび（4年生）保護者と子どもがスズランテープで校庭の遊具を包む。
・幼保小の連携（3年生）近隣の幼稚園・保育園に出前授業。紙を切って貼りつけ、ペンで描き加えたりし、「ムナーリの大きな木」に。…他にも、5実践を紹介。

◆気をつけたい「言語活動の充実」…一人歩きしがちな言葉　図画工作の教科のねらいで。
◆注意！共通事項にある「イメージ」…イメージは誰のものか大切にすべきは勿論子どもの。

〈発表2〉「美術鑑賞教育における地産地消とは」　湯　浅　大　吾（札幌市立伏見小学校）

子どもと対象（ひと・もの・こと）との距離。成長とともに広がっていくことを考えれば、美術教育のスタートは地元の野外彫刻や作家の作品が望ましい。道立近代美術館を利用した実践の紹介。

・「教室は美術館」（4年）…鑑賞した美術館の作品（データ画像）から、気に入ったものを選んで『ぴったり』の額をつくる実践。絵をよく見て、自分なりのストーリーもつける。
・「教室は美術館2」（4年）…絵巻のような複製を元に、各グループがお話を考えた。並べ替えると新たなお話が浮かぶ。美術館に出向き、お話を発表。他3実践を発表。

○指 導・助 言（多くの貴重なご助言をいただいたが、一部を掲載）

鈴石　弘之　先生（元全造連委員長）

・保護者との造形遊びで保護者の理解を得ることは大切な実践。「図工は子供にとって必要」と考える大人は2割しかいないという現実を忘れてはいけない。
・北海道の先生方は写実の実践が多いように思う。低学年の実践は、本当にあれでよいのか？考える必要がある。

横内　克之　先生（新宿区立花園小学校）

・子どもの「遊び」は生活の中から生まれてくる。造形遊びの「遊び」とは？
・共通事項の『形、色、イメージ』だけでは足りない何か。頭の中に浮かんでいるようなものでなく、体感するテクスチャーこそがこれからの造形教育で重要になるのではないか。

○閉会の言葉　沖縄県造形教育連盟理事代理　大　城　悦　子（うるま市立高江洲小学校長）

2011.7.26
13:30～15:00
ホテル
ライフォート札幌

全国造形教育連盟中学校部会（全中美連拡大理事総会）

中学校部会 会場

司　会　森　繁樹（大阪市立横堤中学校長）

記　録　安藤　聖子（稲城市立稲城第二中学校長）
　　館内　徹（札幌市立あやめ野中学校）

出席者　80名

○あいさつ

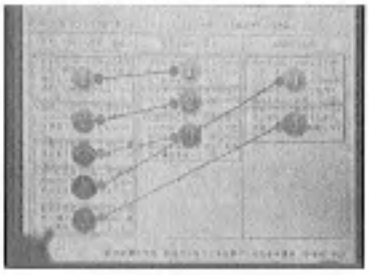
全国中学校美術教育連盟理事長　正留久巳（日野市立三沢中学校長）
札幌市造形教育連盟会長　塚野昭臣（札幌市立向陵中学校長）
全国造形教育連盟委員長　永関和雄（町田市立町田第三中学校長）
日本教育美術連盟副理事長　松山　明（大阪市立昭和中学校長）

○討　議

1）平成22年度活動報告
2）平成22年度会計報告
3）平成23年度役員・事務局について
　平成23年度より事務局を東京から大阪に移動することが確認され、それに伴い新しい役員が承認された。
4）平成23年度活動方針　…承認
5）平成23年度予算案　…承認

○記念講演

文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官　東良雅人　先生
演題『中学校美術のこれから』
　～新しい中学校学習指導要領の全面実施に向けて
全面実施に向け、改めて学習指導要領の改正の意味や内容について解説していただいた。



○地区報告・交流

1）「北海道の中学美術教員配置の実態・研究の報告」
「札幌市の美術教育、研究活動の報告」
札幌市立あやめ野中学校　館内　徹
北海道の教員配置の実態の継続した調査の報告、ネットワークを中心とした地域の研究会同士の交流の様子を報告。（道造連ネットワーク部会の資料を使用）また、札幌市の活動については、札教研事業中学美術項目の活動（中文連展を含む）を中心にした報告があった。資料として「実践と研究」が配付された。

2）提案「中学校美術教育の交流を進めるブログの開設について」
全中美事務局　山崎正明（千歳市立北斗中学校）
中学校美術の研究活動を広く交流し合う場としてブログを開設していくことを、具体的な例をあげて提案された。

3）その他
時間が足りなく、他地区からの報告・交流を行うことができなかったので、報告時間の確保をという要望が上がった。

○閉会の言葉　東京都中学校美術教育研究会会長　菊田　寛（墨田区立吾嬬第二中学校長）

2011.7.26
13:30～15:00
ホテル
ライフォート札幌

全国造形教育連盟高等学校部会

高等学校部会 会場

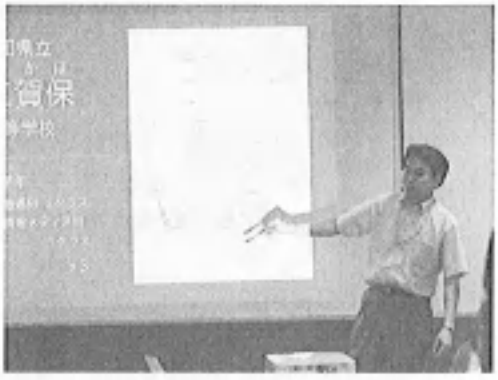
司会・記録　齋藤　　周（札幌市立旭丘高校）

出席者
小野征一郎・落合　典美（九段中等教育学校）
長島　春美（東京都立田柄高）・黒木　　健（秋田仁賀保高）
高向　修子（札幌藤女子高）・齋藤　　周（札幌旭丘高校）

○実 践 報 告

「総合芸術部の活動と意義について」「鑑賞の工夫」

黒木　　健（秋田県立仁賀保高等学校）



◇総合芸術部の活動と意義
- 美術に限らない活動の充実

◇鑑賞の工夫
- いつも当たり前にあることへの問いかけから生徒への発問につなげていく工夫
  「アートの視点で読み解くスーパー戦隊」シリーズの紹介
- 題材が生まれたきっかけ
- 授業を支える二つの輪
- 学びの相関図

○学校の実践を交えた意見交流

◇生活の中に美術があることについて
- 色が機能をもつ
- 身近なものを使う
- 美術を専門としない普通の生徒にも

◇評価について
- 生徒や保護者に正しく伝えられているか
- 生徒自身の自己内評価
- 評価についてのアンケート

参加者は少なかったが、和やかな雰囲気の中で意見交流ができた。

全国造形教育連盟大学部会総会・大学研究発表会

2011.7.26
13:30～15:00
ホテル
ライフォート札幌

大学部会総会会場

司　会　教育大学協会長　**藤江　　充**（愛知教育大学）

記　録　全美協事務局長　**山野てるひ**（京都女子大学短大部）

出席者　12名

○開会の言葉　全美協会長　山　中　　隆（華頂短期大学）

○あいさつ　　会長　山　中　　隆（華頂短期大学）

○議　　事

1）出席者自己紹介

2）教育大協会美術部門と全美協で交わした協定書のなかの申し合わせ事項の協議について

・教育大協会美術部門と全美協でつくった全国大学造形教育連絡協議会を窓口として全造連大学部会に対応していくという方針を確認した。

○研究発表

「欧米の著名美術館における教育普及活動に関する面談調査レポート」

山　口　善　雄（宇都宮大学）・天　形　　健（福島大学）

平成19年～22年度科学研究費補助金基盤研究Ａによる３年間の欧米美術館の実地調査の紹介調査した美術館

①シカゴ美術館　②メトロポリタン美術館　③ピッティ宮殿美術館
④バチカン美術館　⑤ルーブル美術館　⑥ピカソ美術館
⑦コートールド協会美術館　⑧イギリス・ナショナルポートレートギャラリー
⑨デン・ハーグ美術館　⑩国立ゴッホ美術館
…など。

調査結果のまとめ

・フランス革命の精神を再確認する欧米と日本の精神的文化の歴史的背景の相違。
・美術館長の構想と実践力が美術館を変える。
・美術館教育担当者の英知と連携が美術館教育の質を変える。
・制度的文化としての学校と美術館との関係を重要視する記述化と実体化に対する努力の必要性。
・実空間と情報空間のデザインと質の重視。
・方針と実践力をもった経営戦略の重要性。
・究極の人間形成を行う前に、戦後おろそかにしてきたステップとしての技術の見直し。
・鑑賞は美術作品に限られたものではなく、サブカルチャーやデザインや限界芸術や子どもの視点を入れることが重要。
・美術館とはどのようなものなのか、美術とは何か、美術について考える機会。

○閉会の言葉　全美協会長　山　中　　隆（華頂短期大学）

2011.7.26
13:30～15:00
ホテル
ライフォート札幌

全国造形教育連盟幼・保部会

幼保部会 会場

司会・記録　篠原　　寛（札幌市立西小学校長）

出 席 者　55名

○あ い さ つ　全造連幼・保部会部長　槇　　英　子（淑徳大学）

○研　　修

1）実践発表 「この間の全国大会に向けた取り組みについて」

淑徳大学准教授　槇　　英　子　先生

・この間の全国大会に向けて取り組まれてきた実践をプレゼンテーションで紹介

2008 大阪大会

2009 大阪大会
〈公開保育〉
堺辺白百合
幼稚園

福島大学
附属幼稚園

なんにもない島探検隊
～みんなでカラフルな島～

2010 福島大会

◇全国造形教育研究大会の公開保育の意義として、①「造形表現によって子どもの心が開放され、可能性が引き出されることを目の当たりにし、造形活動の意義を共有し、再確認することができる」、②「各地域の特色を生かした環境や教材の工夫、質の高い教育を実現するための具体的な手立てを学び合うことができる」とまとめられた。

2）「幼稚園・保育園ですぐ使える手作りおもちゃ実技講習会」

講　師　吉田学園保育科（児童文化）

非常勤講師　伊　藤　善　彬　先生

●折り紙、紙袋、ティッシュの空き箱、牛乳パックなどを使って、口や手などが動くパクパク人形の作り方を説明。

●その後、参加者全員が材料を選び実際にパクパク人形を作る。

●完成したパクパク人形を使って、人形劇をしてみせる。

熱心に指導してくださる伊藤先生

槇先生も参加して

伊藤先生の参考作品

会場いっぱいの50名を超す参加者が真剣に、そして楽しそうに作る

○閉会の言葉　篠　原　　寛（札幌市立西小学校長）

全国造形教育連盟大学研究発表会美術館部会

2011.7.26
15:00～16:30
ホテル
ライフォート札幌

大学研究発表会
美術館部会会場

司　会　阿部　宏行（北海道教育大学岩見沢校）

記　録　全美協事務局長　山野てるひ（京都女子大学短大部）

参加者　16名

○研究発表

「旭川地域連携アートプロジェクト～成果と課題～」

北海道教育大学旭川校　南　部　正　人

1）連携構成

・旭川市内近郊の中学校美術教員グループ十数名
・北海道立旭川美術館学芸員
・旭川市中原悌二郎記念彫刻美術館
・北海道教育大学旭川校美術分野教員２名

2）それぞれの課題

・中学校：中学校美術部（約450名）の活性化と美術館活用、小学校教員の美術図工部会への取り込み。
・北海道立美術館：美術館の予算削減と存立危機の中で来館者増員の方法や事業整理と地域連携の模索。
・北海道教育大学：地域貢献の明確化、地域連携カリキュラムによる学生の実践力養成。

3）実施事業　鑑賞プログラムとワークショップ

内容の３本の柱

・ギャラリートーク：中学校教員・学芸員・大学教員
・アートゲーム：大学生
・ワークシート

①「大平實×美術部　美術部×美術館」中原悌二郎受賞者がワークショップを提供するシステムをつくり、大平がワークショップ（自然物や廃品を用い道具を使わない）を行い、美術部員約200名が参加。
②「ヨーロッパ絵画の輝き展」　対話型ギャラリートーク、アートゲーム
③「片岡球子展」旭川市美術館企画展　解説型
④「ウルトラマン展」旭川市美術館企画展　対話型　カードゲーム

4）成果と課題

◇継続事業プラス新規事業
◇多様な連携の実施
◇実践力を育てる教員養成カリキュラム改革を美術科が先行、地域連携のガイドライン形成
◇美術の公共性を担保
◆組織論が先行し、学習論の欠落
◆造形題材論を進化させる

○討　　議

・多様な連携実施の中で教員免許更新講習制度とのリンクについて、地域の供給資源を有効に活用する。
・大学のプロジェクトによって学生にどのような変化がもたらされるのか。
・断片的にプロジェクト参加している小学生をどう組織化するか。
・既存の教育研究組織の解体とエリア化。
・学生の変容と育ちの視点を成果と課題の中に位置づける必要と、カリキュラム化や制度化の中での形骸化。
・岩見沢校の実践の紹介・事業と授業の間の温度差をどのように埋めるか。

○閉会の言葉　阿　部　宏　行（北海道教育大学岩見沢校）

共同開催会議

2011.7.23
16:30～17:30
ホテル
ライフォート札幌

司　会　稲實　順（大会事務局長）

記　録　実行委員会広報部

出席者　54名

○開会の言葉　大会実行委員長　塚野昭臣

○あいさつ　大会長　菅原清貴
全国造形教育連盟委員長　永関和雄
日本教育美術連盟副理事長　松山明

永関 全造連委員長

松山 日美連副理事長

○議事

1）大会趣旨説明
大会研究統括部長　森實祐里
全道研究統括部長　湯浅大吾

・森實祐里研究統括部長と湯浅大吾北造連研究部長が「"わたし"を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」の研究主題と『「あったかい！」をつなげあう造形活動』の授業実践テーマについて、手作りの紙芝居風のパネルで分かりやすく説明した。

2）大会共同宣言文に関する提案
大会長　菅原清貴
大会共同宣言作成への経緯を説明。

天形起草委員長の代理で提案する
時任　勝　全造連事務局長

〈起草委員〉
全国造形教育連盟副委員長　天形　健
日本教育美術連盟事務局長　藤丸一郎
北海道造形教育連盟　川島正夫

・語句の選択、一部の表現について、全国各地での受け止め方に誤解を生じる恐れがあることなどから、修正要望がいくつか出され、時間内で文言を変更することが難しいため、大会事務局に最終案を一任し、最終日の全体会で発表することで了承。

《正面には、全造連、日美連の連盟旗が》

○閉会の言葉　大会実行委員長　塚野昭臣（札幌市立向陵中学校長）

2011.7.26
15:00～16:30
ホテル
ライフォート札幌

日本教育美術連盟全国理事会

日美連全国理事会 会場

司　会　藤丸　一郎（日本教育美術連盟本部事務局長）

記　録　福岡　知子（日本教育美術連盟本部理事）

出席者　45名

松山　明副理事長

○開会の言葉　日本教育美術連盟副理事長　松　山　　明

○副理事長挨拶　　松　山　　明

○第61回『京 都 大 会』代表挨拶　平　尾　隆　史（京都大会大会長）
（大会会計報告を含む）

○第62回「北海道大会」代表挨拶　菅　原　清　貴（北海道大会大会長）

藤丸　一郎事務局長

菅原大会長の挨拶

喜田　健前京都大会事務局長

大会直前に急逝された岩崎理事長の遺影

○全国理事会成立の確認と議長の選出　……議長に　末　延　國　康（連盟理事）を選出

○議　　事

〈1号議案〉

第63回大会開催地について　　副理事長　松　山　　明

・大阪大会（別紙　日本教育美術連盟新聞）を確認

〈2号議案〉

平成22年度事業報告　　事務局長　藤　丸　一　郎

平成23年度事業計画（別紙資料）　　事務局長　藤　丸　一　郎

1）第54回夏季研究会報（別紙 日本教育美術連盟新聞）　　担当理事　三　澤　正　彦

2）第54回Koyasan集会報告（日本教育美術連盟新聞）　　担当理事　清　原　知　二

3）平成23年度初級研修講座報告（別冊　研修資料集）　　担当理事　古　林　　茂

◆平成22年度決算報告（別紙資料）　　会計理事　福　岡　知　子

◆平成23年度事業予算書（別紙資料）　　会計理事　福　岡　知　子

◆平成22年度会計監査報告（別紙資料）　　監　　査　森　　繁　樹

……以上、2号議案はすべて承認

〈3号議案〉

「高妻教育美術賞」「美術教育功労賞」

選考委員会報告　　事務局長　藤　丸　一　郎

……報告を拍手で承認

○「高妻教育美術賞」「美術教育功労賞」贈呈

◇高妻教育美術賞

菅　原　清　貴（札幌市立幌西小学校長）

◇美術教育功労賞

今　　裕　子（前札幌市立福住小学校長）

松山 副理事長が菅原 道造連会長に贈呈

○第63回大阪大会代表挨拶

松　山　　明　大阪大会大会長

○メセナ団体代表挨拶

西　村　彦四郎　氏

平尾隆史 京都大会大会長

メセナ団体を代表して 西村彦四郎氏

末延國康 理事の開会の言葉

○閉 会 の 言 葉　日本教育美術連盟理事　末　延　國　康（連盟理事）

共同開催懇親会

2011.7.28
17:30～19:00
ホテル
ライフォート札幌

記　録　実行委員会広報部

出席者　74名

○開会の言葉

大会実行委員長
塚野昭臣

○主催者あいさつ

大会長
菅原清貴

○はじめの乾杯

全国造形教育連盟委員長
永関和雄

○司会

大会事務局長
稲實　順

○来賓あいさつ

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
東良雅人氏

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
岡田京子氏

○懇親・交流

1日目の諸会議が同じ建物で開催され、この懇親会に両団体が出席し、懇親・交流が図られた意義は大きい。

金城 沖縄大会長

○次回開催地あいさつ

沖縄大会大会長　金城安正

○終わりの乾杯

日本教育美術連盟副理事長　松山　明

○閉会の言葉

副大会長　富田賢司

松山 日美連副理事長

富田 副大会長

平岡中央小学校
「チムニーくん」

中の島小学校
「なかちゃん」

星置東小学校
「キュコラ」

小学生が考えた学校のキャラクターを大学生が立体作品に

厚別西小学校
「ピカ☆スマイリン」

心と心をつなぐ芸術プロジェクト

円山小学校
「さくまるちゃん」

大会３日目の市民ホールのエントランスホールに６体のスクールキャラクターが並びました。
それぞれに、ライティングされ小さな展覧会のようでした。

幌西小学校
「ぴかりん」

Making of school-character

①学校のキャラクターを子どもたちが考え、所定の用紙にかく
②大学生が、それらの絵を参考にして、CGや立体作品にする。
③大学生が、出来上がった作品を、その小学校に届けにいく。

制作　北海道教育大学岩見沢校
４年　鈴木　明倫
２年　赤坂　春妃　小坂　菜緒
小林　美里　瀧　綾子
鳥丸　春菜　野上　幸恵
馬場　享恵　山本　七帆
丸子絵梨夏

子どもアート展2011

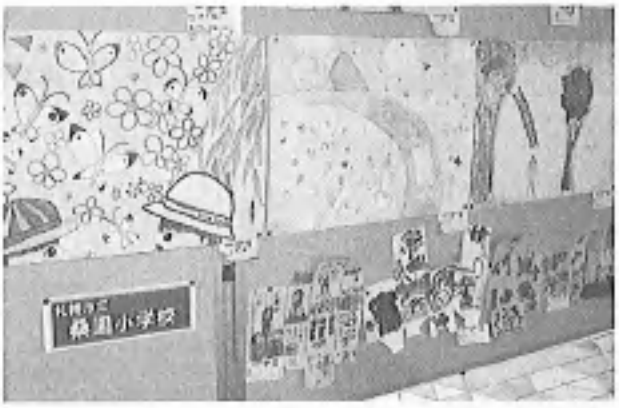
～幼児から高校生まで～

道新ギャラリー

感想カードから

○素晴らしいアート展を拝見させていただき。私も65歳ですが、何か描いてみたり作ってみたりしようと力が出てきました。皆さん、ありがとう。また、これからも見せてください。
○とっても心がなごむ絵でした。特に北光小の○○ちゃんうまかったです。
○いっしょうけんめいかいたのが、ほめられてうれしかったです。
○幼・小・中・高の作品がいっしょに展示されていて楽しかったです。
○みんなとっても色使いが上手だし、それぞれの思いがあふれ、素敵でした。
○努力したことがすごくわかります。将来の芸術家諸君、より大きくはばたけ！
○家具工芸はとても素晴らしかった。日本の家具を世界へ！

市民ホール会場



札幌市役所 1階ロビー会場

【市民ホール】学校キャラクター人形

◇厚別西小学校『ピカ☆スマイルン』 ◇幌西小学校『ぴかりん』 ◇円山小学校『さくまるちゃん』
◇中の島小学校『なかちゃん』 ◇平岡中央小学校『チムニーくん』 ◇星置東小学校『キュコラ』

出品校（園）一覧

【市役所ロビー】
「中央区　子ども造形展」

◇幌西小学校　◇幌南小学校
◇三角山小学校　◇伏見小学校
◇桑園小学校　◇緑丘小学校
◇山鼻南小学校　◇山鼻小学校

【道新ギャラリー】子どもアート展2011

◇ひまわり幼稚園　◇いなづみ幼稚園　◇北園小学校　◇本郷小学校
◇平岡中央小学校　◇厚別西小学校　◇中の島小学校　◇平和小学校
◇星置東小学校　◇西野第二小学校　◇豊平小学校　◇常盤小学校
◇平岡南小学校　◇東苗穂小学校　◇澄川南小学校　◇北光小学校
◇南月寒小学校　◇附属小学校　◇あやめ野中学校　◇星置中学校
◇西陵中学校　◇柏中学校　◇啓明中学校　◇八軒東中学校
◇真栄中学校　◇石山中学校　◇藤女子中学校　◇旭丘高校
◇厚別高校　◇大谷高校　◇おといねっぷ美術工芸高校

愛媛県　松山市立道後中学校　小倉　祥子

授業をされた寺林先生の授業に取り組む姿勢に感動しました。実際に広島へ行って自分の目で、耳で、足で情報を集め、自分の心に素直に感じたままを授業に生かし、生徒たちにも十分にそのことが伝わっていたと思います。また、先生の「語り」がとても心に残っています。落ち着いた話し方、生徒への目線の配り方、間の取り方、生徒との会話、そして、先生自身の明るい笑顔。美術の授業は制作に偏ってしまいがちですが、教師の言葉や表情によっても授業の流れが変わっていくものだと感じました。題材の設定や課題の設定ももちろん重要ですが、教師の「授業力」の大切さに改めて気付かされた授業でした。ありがとうございました。

佐賀県　佐賀市立諸富中学校　中村　誠一

私は、授業を参観するときには、子どもの様子を注意深く観察するようにしています。この授業では、全ての子どもの表情が、授業が進むにつれ、生き生きと輝いていました。子ども一人一人が「自分にもカラーコーディネートをすることができた。」「相手を思いやりながら、こんなにすてきな作品ができた。」と感じ、達成感を味わうことができて自己肯定感が育まれたと思います。授業者の先生の準備や手立て、個々へのさりげない支援と評価は子どもたちにやる気と勇気、自信を与えていました。この授業で深まった色彩に対する興味やしっかりと身に付いた目的に応じて色を混み合わせる力を子どもたちは、今後生活の中のいろいろな場面で生かしていくことでしょう。子どもたちの輝き、そのための真摯な取り組み。この"あったかい"北海道での経験を九州・佐賀に一番のおみやげとして持って帰りたいと思います。

北海道　旭川市立東光小学校　河野　昌一

まずは今回大会に参加させていただき、大きな学びを頂いたことに感謝申し上げます。

あらためて高校美術における題材設定の難しさや、単元の進め方について考えさせられました。特に、導入の仕方で生徒の意欲を引き出したり、幅広い個や技能の差を考慮した題材の設定により、意欲的に制作に取り込めるようにしたりするなど、授業者の準備が重要であることを強く感じました。また、生徒の取り組みに対する評価ばかりでなく、授業者として単元・題材・進め方等について自己評価することにより、同じ単元・題材であってもより良くしていく必要性があることを感じました。また、その際には、生徒の感想・評価等も積極的に取り入れていくことも大事であると思いました。

栃木県　宇都宮大学教育学部付属小学校　大塚　智大

教室に入ると、何ともアットホームな雰囲気で、その中に、子どもたちの笑顔が溢れていました。授業開始前に、前時までに作ったくるくる丸めた紙を机の上に出していました。形ごとにきれいに並べている子、高さや色を並び替えている子など、並べる様子見てこの時点から子どもたちの作品づくりが始まっているように感じられました。授業が始まり、ほとんどの子どもが何の戸惑いもなく、次々にボンドを付け、台紙に貼っていく姿に驚かされました。それまでに、子どもたちが思いをふくらませていたからだと思います。そして、日頃から子どもたちが伸び伸びと活動していることがよく分かりました。また、濱口先生の子どもに対する声かけが受容的で温かく、その声かけで子どもたちが自信を持って取り組めていました。日頃からの子どもとのかかわり方の大切さを改めて感じました。すばらしい授業をありがとうございました。

北海道　札幌市立新川小学校　原田　香利

暑い中、子どもたちの瞳がきらきら輝くすてきな授業がたくさん見られました。今まで準備された先生方の思いが伝わってくるすばらしい大会だったと思います。参加できて本当によかったです。しばらく図工の世界から遠ざかっていましたが、今回の大会で感じたことは、今まで「技術を学ばせる」のか何のために「感性を磨く」のか、私の中であまりはっきりしていなかったことがずいぶんわかりやすく整理されたなということでした。また子ども同士の関わりを大切にした授業づくりにもとても興味をもちました。参観させていただいた授業「にじいろのもりであそぼう」も幼稚園児と２年生のふれあいを大事にし、子ども同士が、お互いに色作りや見え方について話しながら試す姿を見ることができました。私にとっては新しい図工の進む姿が見えた研究大会でした。ありがとうございました。

福井県　福井市立木田小学校　八杉　裕美

北海道に来てよかった！今まであまり図画工作の授業を参観したことがない私ですが、子どもの目が輝く授業をたくさん見ることができて、とても勉強になりました。《どんどん広がるみんなの夢》では、楽しそうにシャボン玉をふいたり受け止めたりする子どもたちの姿がとても印象的でした。シャボン玉を紙に残せる驚きやはじけたときの形の面白さ、色を重ねたときの美しさを感じ取ることができるとても魅力的な題材でした。子どもの『色を混ぜたい』という発言にも大きな紙を準備することで応えていました。先生が、想定外だった子どもの活動を止めなかったことは大切なことで、長い目で見ると子どもの想像力を伸ばすうえでとても重要だと思います。これまで、いかに教師の求める活動に子どもたちを仕向けていたかを反省した瞬間でした。最後に、追試をする時にはペア活動で出来上がった作品を紹介しながら、紙に残ったさまざまなシャボン玉の色や形の違いにふれ、活動のめあてをもう一度意識させるとよいのではないでしょうか。

青森県　弘前市立石川中学校　藤田　澄生

則友先生の笑顔とひたすらにつぶやきを拾う授業姿勢、それに応える子どもたち。あたたかいやりとりがあふれる授業でした。単純な「自分一人」による「自分のため」の造形活動ではなく、誰か大切な人のためというモチベーションを高める導入に続き、クラスの仲間と交流する中で気付いた価値を作品に込める展開を経て、生徒自身の内と外にある“もの”や“こと”を往還させながら色について学習を深めさせる、そんな提案性の高い実践でした。準備に時間をかけた授業に続き開催された分科会の協議の場では、建設的な意見や質問が多く発せられました。ただ、具体的な討議の柱が二本提示されましたが、その柱に関連した本時参観の注視点を事前に参観者にペーパー等で明示していれば、短い時間でより話し合いを深められたのでは、と感じます。意図的な制限により一層フォーカスされる学びの可能性や、この題材を本校向けにどう「料理」しよう？ということを考えながら参加でき、とても勉強になりました。

北海道　帯広市立帯広第一中学校　村中　鉄也

僕は彫刻が大好きだ。だから６年生が「彫刻の作品のパンフを作る」というグループ学習に、とても興味をもった。本郷新の彫刻を見て触れる、生の体験がとてもいい。彫刻は、絵と比べて地味な感（笑）。きっと、優しい先生と、彫刻美術館のお姉さんとのコラボで、作品と生徒たちとの素敵な引き合わせがあったのだろう。『無辜の民（むこのたみ）』の感想では「頭から下半身まで空間がある。ここからこの彫刻はもがいていると思った。」するどいなぁ。『花束』には「見る角度によって微笑みにも怖くも見える。題名をつけるとしたら『喜怒哀楽』がいいと思う」という感想。本物の芸術ってちょっと怖い感じがすると何かで読んだことがある。この意見も核心を突いているのかもしれないなぁ。ロダンや高村光太郎を出すまでもなく、彫刻（家）は『語る』。無言で語る。性急に質感の違う言葉で置き換えなくとも、じっくりと何度も作品と語り合えるきっかけをつくりだしたいですね。

北海道　河東郡鎮西村立鎮西小学校　金井　歩美

これまで図画工作の研究授業を見る機会になかなか恵まれずにいた私には、今回の「図画工作・美術教育研究大会 IN 北海道」はとても楽しみなものでした。授業は、小学校３年生「もく木　トントン　わ～くわく」を見させていただきました。橋本先生のあたたかな語り口、子どもたちが新たな技術を習得したり、イメージを具現化する様子に、見ている私までもわくわくすることができました。私にとって収穫だった点は、事後研での先生方のお話です。子どもたちの作品をどんな視点で見るのか、作品の掲示方法をどう工夫するか、何をもって評価するのか、どんな支援があるのか、自分自身が何となくおろそかにしていた部分がくっきりと見えてきたからです。「はやく、子どもたちと図工の授業がしたいなぁ」と思える内容でした。先生方、本当にありがとうございました。また、会場に掲示されていた多くの作品を見ていると、子どもたちの色々な表情が見えるようでした。全国の先生方の実践を直接聞かせていただいたことも話分と刺激になりました。次回も是非参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

北海道　江別市立緑江別小学校　池田　元治

「子どもたち、土門先生、造形教育の大きな可能性を感じさせる授業でした。本時の目標と活動内容との整合性が図られていない点や外部人材活用のねらいが明確になっていないという課題がありましたが、研究主題・授業実践テーマを強く意識した題材構成となっており、授業者の意図がよく伝わってきました。特に、外部人材の活用に『社会とのつながり』を、また、ダイナミックな授業展開に『授業のひろがり』を見てとれました。欲を言えば、指導案で計画していた『全員で作品鑑賞』で、他者とのかかわりを深める場面に時間をかけてほしかったと思いました。すばらしい授業を公開してくれた子どもたちと土門先生に、心より感謝致します。ありがとうございました。

北海道　教育大学付属札幌小学校　井上エリカ

公開授業は藤岡先生の『思いとび出して』を拝見しました。いつもとは違う教室にたくさんの見学者。緊張して当たり前の場面でしたが、授業前に行ったアクティビティで子どもたちの表情も変わりました。緊張した中でもすぐに楽しく過ごせたのはやはり担任との信頼関係が大きいと感じました。制作活動中は一人ひとりに対する丁寧な声かけがありました。適切な声かけ・アドバイスによって子どものアイディアが広がったり、またそれをすぐに実行に移せる環境で本当に楽しそうに飛び出す仕組みを広げたり飾ったりしていました。授業後も面白い工夫や頑張った子の作品を紹介しました。その際にほとんど全員の子の手が挙がったことも声かけが的確だったからでしょう。授業後の部会においては藤岡先生の想いと授業づくりを聞いた後、２本の柱に沿って行われました。最初は少しずつだった意見も徐々に増え、２本の柱もどんどんふくらみました。１つの授業とその分科会だけとは思えないほどたくさんの大切な考え方や姿勢を学ばせていただきました。ありがとうございました。

北海道　小清水町立上別小学校　佐藤奈津子

授業後の子どもたちの感想を聞いて、「『美術』が自分を表現する方法の一つなんだ」ということが、端的に伝わっていると感じました。いわゆる歴史に残る作家の作品鑑賞では、どうしても特別な世界のことのように受け取られがちだけれど、隣のお兄さんお姉さんのような人たちが、ちょっと『変わった』作品にすごく『真剣』に取り組んでいることを知って、「感じ方」や「表現の仕方」はみんな違っていいんだ、自分のやり方に自信を持っていいんだというメッセージを受け取ることができたのではないでしょうか。美大生側もまた、自分の表現を外に向かって広げるうえで、収穫が多いと思います。小中学校の中にアトリエがあって制作過程が見られるような取り組みの話が出ていて、いいなと思いました。もっと美術が身近なものになるには、日常にそうしたアートな風景があふれるのが何よりです。たくさんの刺激を受けました、私も自分の日常実践を頑張っていきたいと思いました。みなさんお疲れ様でした。

北海道　七飯町立大沼中学校仁南谷分校　高島　純

私はデザインの実践をするときに、どうやって発想を膨らませるかということで常に苦労しているので、この授業を参観させていただきました。テーマは『平和』という、子どもたちの日常では考える機会の少ないものだったので、どのような発想をするのか興味深く思っていました。実際にアイディア用紙を見てみると、どの子も工夫を凝らしていて、発想の豊かさに驚かされました。また、交流では『作者は何も語らない』という方法を取られていたので、これにも驚かされました。全体を通して、寺林先生の熱い思いと的確な支援で、子どもたちが実にのびのびと活動している印象を受けました。今後の参考にさせていただきます。ありがとうございます。

北海道　函館市立中の沢小学校　宮川　典子

子どもたちと学生、みんなの笑顔が印象的な授業でした。４つのグループに分かれた児童が、それぞれ２名の学生のナビゲーションで作品を鑑賞する（制作者ではない学生のファシリテーションにより、児童の思いや考えが出尽くしたところで作者が制作の動機やテーマなどを語る）流れだが、普段あまりふれることのない作品（エッジング・写真・油彩・ポップコーンを用いた立体・巨大なきり紙細工）を様々なアプローチ（作品にふれたり寝転がって見たりなど）で鑑賞し自由な雰囲気で話し合ったり作者の思いにふれたりすることは子ども達にとってはエポックメーキングな体験だったようです。図工に苦手意識をもっていた子どもたちにさえ鑑賞の楽しみを十分に味わうことのできる場であったと思います。

滋賀県　滋賀大学教育学部附属小学校　山田　和美

仲間とかかわり合う温かい雰囲気の中で、子どもたちは、自ら対象物に働きかけ、気付き、思いを膨らませ、表すことを繰り返していました。子どもたちの『こうやりたい』という挑戦が、自分の形や色を描き、空へのイメージを作り上げて行くことに繋がっていると感じました。このような表現への思い入れや多様な広がりを大事に、図工を通して子どもたちが豊かな情操を養っていってくれることを願っています。

北海道　北広島市立東部中学校　山内菜穂子

授業開始に時間差があったので、校舎に迷いながらも欲張って複数の授業の導入部分を参観しました。班隊形になって、リーダーをじゃんけんで決定する場面から拝聴。生徒の動きや指導者のアクションは、たくさんの先生方の肩越しにやっと確認しました。仏像画像を選ぶ場面での、指導者のちょっと過激な助言も、生徒との信頼関係が結ばれている証拠だと実感しました。リーダーの指示で、四つに分類された仏像が指定された掲示板にスピーディーに張られていく。ストップウォッチも小気味よく時を刻む。生徒の多くの発言は黒板にまとまっていく…。夏の暑さに負けない生徒の活気に満ち、ちょっと時間オーバーの刺激的な授業でした。仏像の画像の準備、選定、４種類の分け方、発言の板書の位置なども指導者（チーム）が膨大な時間をかけて準備・決定されたことも教えていただきました。校内に複数の美術教師がいると、日常的に授業の交流が可能なのにと昔のことを思い出しました。

北海道　北海道造形教育連盟顧問　伊藤　善彦

全国大会、本当にお疲れ様でした。

三日目の全大会に象徴されていたように、学び合う大会というのはこのようになされるべきだということを北海道から発信されたと感じ感動いたしました。先生の語る温かさという理念が最後まで形になっていたことに感服いたしました。全ての授業者をステージに上げてのプレゼンテーション。その授業のすべてが素晴らしかったからこそ、四人の講師の講評の中で具体的にそれを語らしめていたのだと思います。

三月、幌西小で授業者に『内定おめでとうございます』と語りましたが、あの舞台に上がった皆さんに『おめでとうございます。ありがとうございます。』と声を掛けてあげたいと思いました。今回こそ、北海道造形教育連盟が目指す理念を忠実に全ての授業に具現化されていたことはなかったのではないでしょうか。

その点で、今大会の全てが最高だったと思います。この形が、沖縄へ、大阪へ、そして帯広へ引き継がれることを強く願っております。あの全体会こそが、最終的な学びの大会の引き継ぎの場だったと思います。スタッフの皆さんの献身的な、そして見事なチームワークに大きな拍手を送りたいと思います。その一コマをお手伝いさせていただいたことに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

北海道　北見市立相内小学校　森野　晃

先日は授業公開を参観させていただき、ありがとうございました。早速、授業を見た感想ですが、子どもたちが自信を持って取り組んでおり、楽しそうだなと感じました。授業実践テーマにあてがっていた『あったかい！』を目の当たりにしたように思います。一度、屋外で使用していたため、ポリシーと自身に対する新しい発見や驚きは薄っぺらかったかもしれません。しかし、『飾る』という表現活動に夢中になっている姿は、積み重ねた経験があったからだと思いました。また、支援員さんがいることにより、子どものやりたい願いの幅が大きく広がったように思います。届かないから、危ないから、といつの間にか限られてしまう空間も、この授業にはありませんでした。「迷ったらやってみよう」と声をかけている支援員さんもいました。自信がなくてあきらめてしまうかもしれないときの応援の声はきっと嬉しかったことでしょう。始めから終わりまで『あったかい！』授業でした。

あとがきにかえて

全国大会をつくってきた統括部長のみなさんの感想です

「素晴らしい授業だったよ！」「あったかい大会ですね」とたくさん声をかけていただきました。授業者の努力や授業づくりに携わったみなさんの協力、そして、それを陰で支えてくれた方々のお力です。ありがとうございました。
（森實　祐里）

大会づくりに際しては、永関全造連委員長、故岩崎日美連前理事長を始め助言者、提言者の方々など全国の皆さんに支えていただきました。大会３日間で参会者の皆さんと一体感を味わえた経験は、一生の宝です。ありがとうございました。　（濱浅　大吾）

椅子・机運びを始め、展示や装飾、駐車場、会場への案内看板持ち、子どもたちの誘導…様々な仕事を本当にたくさんの皆さんに支えていただきました。会場校の先生方にも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。
（八田　博之）

『こどものまなざし』の扉での授業づくりに加えて、『児童・教師の協力のお願い』『扉分科会』『大会宣言』等の仕事もさせていただきました。ご協力に感謝いたします。
（川島　正夫）

「子どもアート展」、「レセプション」、「業者展示」、「全体会の運営」などなど、幅広く仕事をさせていただきましたが、どの業務も、総務部だけでなく各方面の方々の協力とご支援で形になったものばかりでした。深く感謝いたします。
（東　尚典）

老体に鞭打って頑張った広報部の仕事も、この思い出のアルバムともいえる集録の発送でやっと終わりです。皆さんに感謝！
（中居　正光）

大規模な大会で受け入れ態勢が不安でしたが、多くの方のご協力により乗り切ることができました。関係者及び参加者のご協力に感謝いたします。　（箭内　浩之）

東北以北では初めての共同開催（全造連と日美連）を無事に終えることができたのも、あったかい！すばらしい！スタッフに恵まれたからこそだと思います。みんなのパワーやがんばりに感謝です。
（大会事務局長　稲實　　順）

子どもたちにも、私たちにも記憶に残る大会となりました。子どもたちの生き生きと輝く造形する姿は、参会者に感動を与えたといっても過言ではありません。これからも、日々の実践を大切にしていきましょう。
（大会事務局次長　櫻田　　豊）

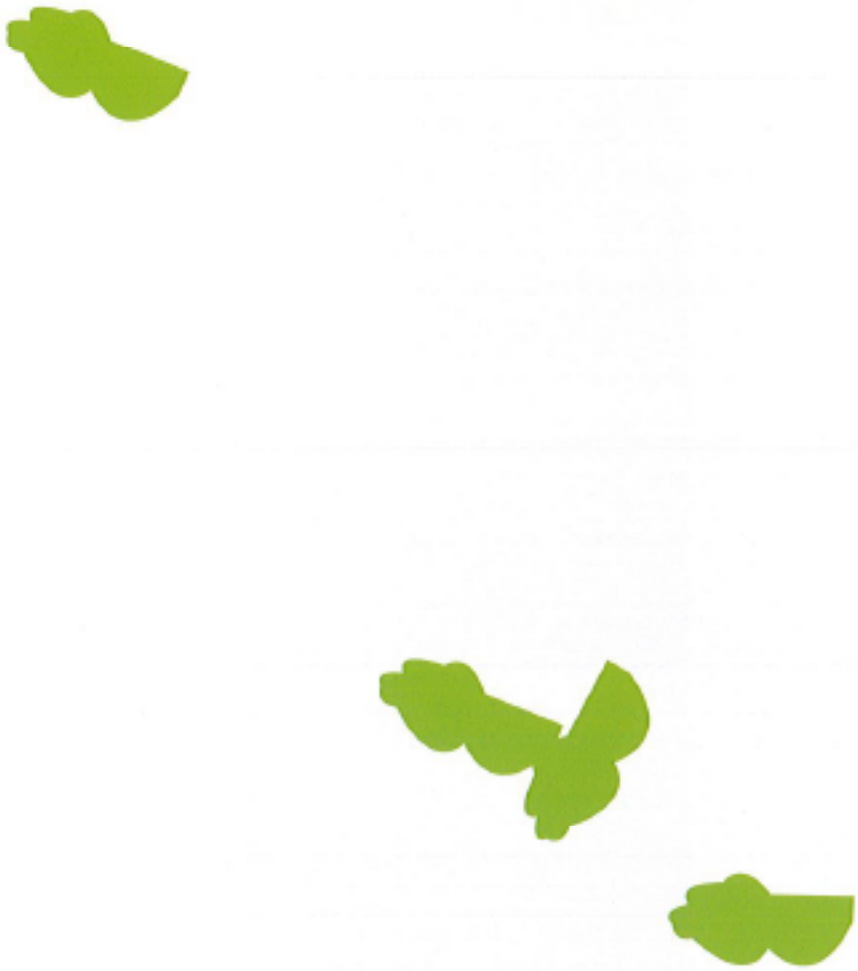
全造連と日美連の共同開催を終えて、感じたことがあります。どちらの連盟も図工・美術教育で目指している授業の姿や方向性は、大きく違わないということです。従って、今後もお互いによいパートナーとして、切磋琢磨して交流しあうことが大切だと思います。また、図工・美術教育の未来を見据えて連携・協力について議論することも必要かな？と思いました。
（大会会計部長　三井　　哲）

2011全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道

大会集録

“わたし”を創る

～自立と共生の造形教育をめざして～

2011年12月16日発行

発行者　北海道造形教育連盟
代表　会長　菅原　清貴
事務局　札幌市立旭小学校
TEL（011－811－4148）
FAX（011－811－1382）
事務局長　稲實　順
編集　全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道　広報部
（中居正光、松本和彦、小林充裕、小林知広：研究部）
印刷・製本　小南印刷株式会社
札幌市中央区北９条西23丁目
TEL（011－641－5373）